俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3－28－10
郵便番号160
電話（03）367－6621（代）
発行人　草間時彦
定価　100円（送料別）
（年1,000円　送料300円）
振替口座
東京6－－273番

意義も深く開催

第11回通常総会と創立20周年記念式典

社団法人俳人協会の昭和五十六年度（第十一回）通常総会・俳人協会各賞授与式・二十周年記念式典・記念懇親会が、二月二十七日（土）午後一時から、東京・霞が関ビル東京会館において、盛会裡に開催された。

この日、朝のうちは雲が低く心配されたが、昼頃から晴れて、式典日和となった。

（関連記事2・3面に）

華かに各賞授与式も

通常総会

定刻一時に山崎ひさを幹事の司会により有効委任状二、四八〇名と出席予定者三〇〇余名により本総会の成立が宣言されて開催。

大野林火会長が正面議長席に着席。最初に草間時彦理事長による一般報告から入った。（要旨別項）

そのあと議題の審議に入り、第一号議案「昭和五十六年度事業報告および決算」について、鷹羽狩行理事、松崎鉄之介理事から、説明があり、大島民郎監事から「適正に処理されている」むねの監査報告が行なわれた。

引続き第二号議案「昭和五十七年度事業計画案および予算案」について原裕理事、松崎鉄之介理事から説明があり、一括質疑に入ったが、異議なく満場一致で承認された。新年度事業の主なものは現在編集中の「会員名鑑」の刊行が九月ごろに、自註シリーズの姉妹篇ともいうべき「脚註名句シリーズ」の刊行、「俳句文学館紀要第二号」の刊行など、また二十周年にちなむ各地の大会や会員のつどいの開催などでほかは例年と変わらない。

議事録署名人には浅野正、大網信行両氏が指名され、通常総会は円満に終了した。

各賞授与式

少憩後、宮津昭彦幹事の司会により、各賞の授与式に移った。

第二十一回俳人協会賞、第五回同新人賞、第二回同評論賞の授賞式が行なわれ、出席の各氏に大野林火会長から賞状と賞品が贈られ、会場からは万雷の拍手が送られた。

このあと俳人協会賞の橋本鶏二、古賀まり子の両氏に対し沢木欣一副会長から祝辞があり、橋本氏の『鷹の胸』は昭和四十六年から四十八年までほぼ十年前の作品の成果をまとめられたものであるが、ものにこだわらずにゆうゆうとして、いきの長い作家であることに感銘したと話し、さらに数句を引用して感覚の柔軟さと精神の強じんさによる写生道の作家をたたえた。

古賀氏の『竪琴』については母の晩年と母を亡くされたかなしみを中心に詠んだ諸作には人生の重みをひしひしと感じさせ、人間と自然を通じ神の恩寵を受けたような句集であるとたたえた。

第五回俳人協会新人賞の桧紀代氏『呼子石』と黒田杏子氏『木の椅子』の二句集については成瀬桜桃子新人賞選考委員会委員長から祝辞がおくられ、二句集の共通点や相違点についてユーモアたっぷりに紹介され今後ともよきライバルであれと結んだ。

第二回俳人協会評論賞の桑原視草氏『出雲俳壇の人々』には、村山古郷理事から祝辞がおくられた。昨今は歳時記ブームの波に乗って地方歳時記の刊行が目立つが、本書の刊行と受賞によって地方俳壇史の掘りおこしのきっかけとなれば幸いだと述べ、著者は学者ではなく、とくに専門家でもないが、一俳人のかたわらの仕事として独得な内容の書として非常に価値が高いものと結んだ。

このあと各氏から謝辞があり、橋本鶏二氏は伊賀へ移住後の俳句一途の心境を淡々と語り、古賀まり子さんは師の水原秋櫻子先生の末期とみずからの六度目の手術のことなどをきっぱりと語った。また桧紀代さんはペーネーム桧紀代はピノキオのもじりであることを披瀝し、黒田杏子さんは本当の自分をさらに俳句に投入したいと決意を述べた。

桑原視草氏は自著とはいえ、多くの方々の支えによって本書の内容が作られたむねを語った。最後に各位に花束が贈呈され、祝電が披露されて、はなやかなうちに授与式は終了した。

通常総会に参会した会員の皆さん

記念懇親会で乾杯の音頭をとる青邨顧問

米沢、清水氏に感謝状

20周年記念式典

ここで再び少憩ののち、三時三十分から中村将晴幹事の司会により記念式典が挙行された。

開会のことばが皆吉爽雨副会長からあり、このあと、大野林火会長が挨拶に加えて、協会二十年の歩みについて述べた（要旨別項）

次に物故者に対し黙禱がささげられ、安住敦副会長（挨拶別項）によって功労者への感謝状贈呈も行なわれ、米沢吾亦紅、清水径子両氏に感謝状と記念品が贈られた。記念品は金一封で各二十万円である。

米沢吾亦紅氏は現在病気静養中のため、代理出席の羽田岳水氏からメッセージ（別項）の代読があった。

清水径子さんは当時自宅に泥棒に入られたことなどさまざまなつかしい思い出を話し、みずからが協会の事務を一手に推進できたことは仲間の支えがあったからと、十名ほどの名前をあげ、感謝状を受けるなら、その方々とともに受けたいと結んだ。

来賓祝辞（祝辞は別項）は佐野文一郎文化庁長官からあった。

中村草田男顧問からの「創立の責任の一端となった者として、創立のときの目的を達成するための事業を今後ともますます充実されることを期待します」という内容の祝電が披露された。

最後に福田蓼汀常務理事の閉会のことばによって記念式典の幕は閉じられた。

記念懇親会

畠山譲二幹事の司会の懇親会が開催されたのはすでに六時近くであった。

協会発展に多大のご尽力をいただいた藤波孝生代議士、佐野文化庁長官、北橋同庁文化部長、中国大使館参事官、日中協会白西事務局長、俳文学の井本農一、尾形仂、東明雅、松尾靖秋、山下一海の諸氏、協会員以外の俳人では金子兜太、鈴木六林男、藤田湘子、久保田月鈴子、阿部完市、幡谷東吾、神谷瓦人、高柳重信氏ら。その他、出版、新聞関係者と多数顔を見せた。

めでたく散会したのは午後七時三十分過ぎだった。

この日の記念大会を迎えるために協会の職員はもちろんであるが、古館曹人理事をチーフとする司会、進行グループが組織され、一連の行事が進められてきた。宮下翠舟・成瀬桜桃子・皆川盤水・山崎ひさを・斉藤夏風・宮津昭彦・畠山譲二・中村将晴・岡田日郎がそのメンバーである。

（岡田日郎記）

文化庁長官祝辞（要旨）

祝辞を述べる佐野長官

俳人協会の創立二十周年を記念する式典が、関係各位多数の御参会のもとに開催されるに当たり、一言、お祝いの言葉を申しあげます。

俳人協会におかれては、「俳句作家の親睦と理解を深め、俳句文芸の研鑽とその発展向上」を目的とし昭和三十六年、任意団体として発足されましたが、その後十年の成果をもとに昭和四十六年、社団法人を設立され、その基盤を強固にして各種の有意義な事業を実施し、今日の隆盛を迎えられました。とくに、俳句文学館を設置されてからは、ここを活動の拠点として、さらに充実した事業を展開され、我が国文芸の普及向上に貢献しておられますことは、まことに御同慶にたえません。

俳人協会設立の趣旨には「俳句は我が国の気象風土を背景に、庶民文学として独特の発展をみ、まさに民族遺産の一つである。われわれは、その正しい伝承と、さらに豊かな稔りを希念してやまない。」とうたわれております。この趣旨にのっとり、今後とも一層の御発展をみられますよう心からお祈り申し上げます。さらに、俳人協会発足以来二十年にわたる関係各位の並々ならぬ御尽力に対し、敬意を表し、ますますの御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

昭和五十七年二月二十七日

文化庁長官
佐野文一郎

☆　☆　☆

春夏秋冬

曽つて、川村柳月主宰「ちまき」で〈五十年後俳句はどうなるか〉というアンケートをとった。

その内容は、文語体は当然、口語に移行してゆくだろう。さすれば定型が守れないという発想で、俳句が存続し得るか否か、という事のようであった。しかし結果としては統一見解を得られなかった▼それから五十余年。現今どこの結社でも悩んでいるのは仮名遣いではないか。歴史的かなづかい、現代かなづかいのどちらかに統一せねばならぬからだ。まして結社の主宰ともなれば筆者も含めて大概は動脈硬化。いまだに文語＋旧かなの郷愁にとりつかれている。筆者自身、句会へも辞典を携えてゆくが、その目的の大半は仮名を訂すためのもの。あっさり新仮名にすればよいのだが、一例をとれば「出づ・出ず」「来ぬ・来ず」など全く意味が反対になる。「出た・出ない」「来た・来ない」と口語にせねばならなくなる▼最近、大結社誌をみても仮名遣いの新旧混交が目につく。文語、口語の混用体のようなものが多くなっているからだろう。この曖昧さ何とも助からない気持だが、十七音という聾唖の世界では益々こうした撞着は強いられるだろう。俳人協会では有季定型を守護神としているが俳句を次代に継ぐためには現代語、新かなに移行せねばならぬのは必然。冒頭のアンケートに鑑み、審議会でも設けて指針を示して貰えぬものか。

（南部憲吉）

俳人協会創立二十周年記念 北陸俳句大会

俳人協会員でない一般の方も投句・出席できます。多数ご参加下さい

日時　昭和五十七年四月十八日（日）午後一時
会場　石川県教育会館、2凡大会議室
金沢市香林坊一丁目二－四〇
（中央公園脇、香林坊バス停下車）
電話〇七六二－二二－二二四一
投句　当日嘱目二句（未発表に限る）
投句締切　当日午後一時
投句料　五〇〇円
講演　平畑静塔・堀口星眠
選者　平畑静塔・皆吉爽雨・沢木欣一・堀口星眠・安養白翠・蔵巨水・高辻紅雨・福永鳴風・吉沢卯一・黒田桜の園・中西舗土・井上雪・北市都黄男・中山純子・柏禎・高島筍雄・太田育子・木沢光捷・沢野柳丈・伊藤柏翠・伊奥幽峰・川上季石・中川志帆・橋本大三・本多静江（順不同）
賞　俳人協会大会賞ほか
連絡先　〒920金沢市片町二－三二－一八　高島筍雄
電話〇七六二－三二－一六九四
主催　社団法人　俳人協会・北国新聞社

俳人協会創立二十周年記念 北海道俳句大会

日時　昭和五十七年五月二十二日（土）午後零時半（受付開始十一時）
会場　札幌市教育文化会館一階ホール
札幌市中央区北一条西十三丁目
電話二七一－五八二一
講演　皆吉爽雨・鷹羽狩行・細見綾子
賞　俳人協会大会賞ほか
主催　社団法人　俳人協会
後援　朝日新聞社

俳人協会創立二十周年記念 東海俳句大会

俳人協会会員でない一般の方も投句・出席できます。多数ご参加下さい。

日時　昭和五十七年五月三十日（日）午後零時三十分
会場　名古屋市第二豊田ビル西館第二豊田ホール
名古屋市中村区名駅四ノ一〇ノ二七
電話〇五二－五八一－一二八一
投句　二句一組（未発表に限る）
投句締切　当日午後零時三十分
投句料　五百円
講演　山口誓子・谷口順三（円空研究家）
選者　山口誓子・安住敦・原裕・福田蓼汀・高崎小雨城・葛山たけし・土生暁帝・橋本鶏二・宮田正和・近藤一鴻・薄多久雄・長谷川双魚・村上冬燕・沢田緑生・太田鴻村・富田潮児・牧野まこと・早崎明・伊藤敬子（順不同・一部交渉中）
賞　俳人協会大会賞ほか
主催　社団法人俳人協会
後援　中日新聞社

一般報告（要旨）

俳人協会理事長　草間時彦

本日は俳人協会の二十周年式典にご出席下さいまして有難うございます。

これから昭和五十六年度総会の議事に入りますに先立って、協会の一般報告を申し上げます。

当協会の昭和五十五年末の会員数は五八五〇名。五十六年中に新しく入会なさった人は五四一名。亡くなられた人は八一名。退会なさった人は八四名で、差し引きして純増加は三七六名ということになります。従って、五十六年末の会員数は六二二六名です。水原秋櫻子名誉会長をはじめとする物故なさった方々に謹んで哀悼の意を表するものであります。

二十年前に本協会が設立されました時点での会員数は僅かに三十名でした。現在の人数から考えますと隔世の感に堪えません。ここで気付かなければいけないことは、二十年前の三十人の先輩諸氏が敷いた路線が今でも生きていることです。二十年を経過しているのですが、われわれは二十年前と同じ路線を歩いているわけです。これは今後も同じことでしょう。その点、二十年前の設立時の会員の方々に心から敬意を表したいと存じます。

本年も新会員を五百名と予定しています。俳人協会の会員数は何名ほどが妥当なのか、この点は慎重に考えなければならないことと存じています。

協会の財政状態について申しますならば、決して裕福とは申せません。といって、その日暮らしということでもありません。後ほど松崎理事がご説明する決算案をご覧下されば判るように借金はありません。まあ、文学的に申すなら清貧ということで、健全財政といってよいでしょう。しかし、これは協会の諸事業、例えばカレンダーの編集にしても、全国大会のお世話にしても、皆、会員の方々が手弁当でやって下さっている。そういう皆様のご奉仕によって健全財政が成立しているのであって、心からお礼を申し上げる次第であります。

協会として今後の事業運営について、基本的に考えなければならないことは、地方在住の会員の人々に協会を身近に思って頂くようにすることだと思います。地方組織の確立も大切で、既に支部が出来たところも、県俳人協会という組織のある県もありますが、まだ全く未組織のところもあります。今年の記念大会を各地で行なうのも地方会員との交流ということに重点を置いてのことであります。

実際のことを申し上げますと、東京在住の会員は俳句文学館を利用出来るし、各種の催しにも参加出来る、地方の人は損をしているという声を拝聴しています。その点を何とかしたいと念じているわけです。特にあれだけ大きな会員を持つ関西支部が未だに専用の事務所を持っていません。何とかしなければいけないと考えています。

また、俳句文学館について申しますと、現在、図書二万冊、雑誌十万冊を収め、俳句の専門図書館として本邦第一のものとなりました。ご協力を厚く感謝します。ただ、俳句文学館は俳人協会が運営しているわけですが、社団法人がこれだけの大きな財産を持つことはおかしい、別の財団法人として独立させるべきだという御指導を関係官庁より賜っています。当然のこととは考えますが、問題は俳句文学館が独立して経済的にやっていけるかどうかということで、俳人協会にとって、今後の大きな宿題といえましょう。

最後に、俳人協会は誰のものでもありません。会員の皆さんのものです。協会の一歩一歩の前進は皆さまのお力によって歩むのです。二十周年を機会に一層のご協力を願うわけであります。

以上、簡単に協会の現状をご報告申し上げました。ご静聴感謝します。

挨拶（要旨）

副会長　安住　敦

感謝状を贈呈する前にひとこと申し上げます。今日の感謝状贈呈の対象になりますのは米沢吾亦紅さん、清水径子さんのお二人でございますのでお二人についてひとこと補足いたします。

米沢吾亦紅さんは、関西方面の代表作家の一人でございます。あれは、昭和四十年に第一回の関西俳句大会を開きました。その時実行委員長の役を引き受けていただきましたから、翌年の四十一年に関西支部が設立されました。その支部長の役を引き受けていただきました。それからちょうど十年経ちます。十年間、協会関西支部のためにご尽力されてこられました。

今日は、ご静養中なので羽田さんに代りにご上京願ったわけです。

清水径子さんは、先程大野さんの回想記の中に、たびたびでて来ましたが、協会の発足当時、清水さんの義兄の秋元不死男さんが丁度、協会の業務推進の中心でございました。その事もあって、つい引っ張り出されましたのが清水さんでした。その時分から庶務会計等何かと御協力願ったわけですが、昭和四十一年からは協会の書記をお引き受けいただき、同四十三年には、当時自由ケ丘にありました小ちゃなといっては申し訳ないのですが（笑）、清水さんの自宅を事務所に使わせていただきました。この事は、清水さんが退任の四十五年迄続けられたことです。協会発足当時の困窮、貧困時代に本当に筆舌につくしがたいお骨折りを得たわけです。

おかげ様で協会も創立二十周年を迎えるという、本当にお目出たい今日、先程の総会におきましてご説明、ご報告ありましたようにますますといった所の協会の順調な発展も、創立当時の米沢さんや清水さんらのお骨折りの賜だと思っております。それで本日このお二人の功績に対して感謝状をお贈りしたいとこう思う次第であります。

20周年記念式典に出席して

岡澤　康司（札幌）

霞が関ビルはやわらかな春の日差を浴びて、厳粛な中にも華やかに記念式典が開催された。会長から二十年の歩みと題して、今日の隆盛に到るまでの苦心談をユーモアを混えながら述べられたが、協会の発足当初は会員数三十名、発起人が集まったのが十八名、また事務局を転々としたことなど、正に今昔の感があり、思わず目頭のにじむ想いであった。

今日の発展に尽された方々に心から感謝の意を表すると共に、一層の発展を祈りつつ、春宵の式場に別れを告げた。

中山　純子（金沢）

心ならずもとはいささか言い訳がましいのですが、考えてみましたら五十年に俳人協会賞を戴くため出席して以来のことです。

久々にいろんな方にお目にかかり嬉しく且つ啓蒙を受けました。

二十周年式典、総会と内容は大変もりだくさんだったにもかかわらず、私には意外に短い時間に感じられたのはきっとそれだけ緊張していたのでしょう、古賀まり子さんの受賞へのご挨拶が印象ぶかく今もこころに残っています。

猿橋統流子（舞鶴）

記念式典での大野林火会長のごあいさつの中の懐古談に非常に感銘を受けた。創立時の会員数が三十名で、創立総会に集った人が十八名ということであるから往時の状況がしのばれて、その方達の悲壮感が伝ってくるようであった。

その外、全国俳句大会の投句料の百円紙幣が集まると匂うという話、何時か秋元不死男先生からも聞いた。秋元先生のお話の最後の「落ち」は、「お紙幣（お甘酒）は臭い」ということで一同爆笑したことを記憶している。懐しいお話であった。

林　徹（広島）

俳人協会の二十周年を祝うためにはるばる広島から上京した。霞が関ビル三十五階の大ホールには、同じ思いで来たであろう人々がうようよしていた。それぞれが俳句に骨身を削ってきた人に違いない。私はそんな人に会うのが好きだ。そんな人と顔を合わせたり言葉を交わしたりしていると心が安らぐ。

前々から名前は知っておりながらこの日初めて会った人もある。会うのが何十年ぶりという人もある。細川加賀氏などとは三十年ぶりのことだった。なつかしかった。九十翁山口青邨顧問に接したのは初めてであった。お元気な姿に勇気づけられた。

三浦恒礼子（高松）

記念式典には、役員席の先生方がよく見える前の方の席につく。めったに拝眉のかなわない地方のものにとって、こんな機会が得られるのは、せめてものよろこびなのである。

林火先生の創立当時の話、径子さんの初期の事務担当の話など、淡々と語られる端々に、幾多の苦境を凌いで今日の盛儀を迎えられた歓びと誇りが感ぜられて、深い感動をおぼえたことである。

それにしても、設立に深くかかわられた源義・風生・秋櫻子・不死男などの諸家いませは亡く、この盛典に見ゆることが出来なかったのは、痛恨の思いひとしおであった。

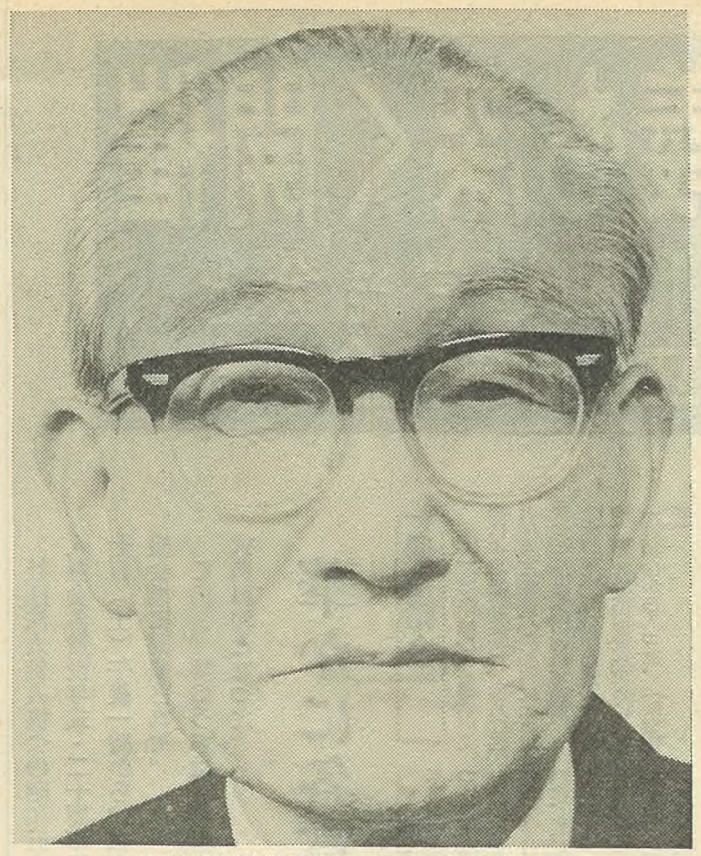
伊藤　通明（福岡）

俳人協会二十周年記念式典に出席して、現在の充実した協会に殆んど寄与していなかったことを思い、心苦しいばかりで弱っています。この充実の裏に多くの方々の献身があったことを考えれば尚更です。

功労者の御一人として感謝状が贈られた清水径子氏の御礼の言葉は、ユーモアとしたたかな臨場感に満ち協会創立期の先生方の御苦労と息づかいを、さながら眼前にする思いであり、今後は多忙を口実とすることなく努めなければならないと心に期しています。

顔 ⑤⑥

労苦報われた酒仙翁



俳人協会評論賞受賞者
桑原　視草

桑原視草さんを語るには、酒仙翁の視草さんを語らねばならない。それほど視草さんは愛酒家で、酒なきところに視草さんの俳句はなりたたないことになるからである。

視草さんの俳句との出会いは古く昭和の初期で、島根師範（現在の島大）在学中に太田柿葉氏（乙字門）に師事し、出雲地方に俳壇史の一冊もないことを知り昭和十二年「出雲俳句史」を出版した。この時氏は二十九歳であった。

その後在職中に応召、中国各地を転戦し終戦後再度教壇に復職と共に月刊俳誌「出雲」を主宰し俳句創作の傍ら出雲俳句史の研究資料の収集につとめるなど、昨年三月まで山陰中央新報の「山陰文芸」の選者などと、その俳句活動は幅広く、島根県俳句協会評議員など地方俳壇に大きく貢献されている。

今度発刊の著書「出雲俳壇の人々」は常日頃俳誌「出雲」の外、各新聞や結社誌など時にふれ書きしたためられた視草さんの半世紀をかけた労苦の集大成である。創作とは別に歴史研究の分野での貢献が認められ「俳句評論賞」に高く評価されたものと思う。

受賞の知らせに酒仙翁視草さんの温顔は紅潮し輝きを増す「前作の不備を補足するつもりで頑張り道なきところに道をつけたのが認められたのでしょう。出版だけで充分なのにこんな大きい賞を戴き同門の今は亡き角川源義さんも吃度悦んで戴ける。」と満足のよろこびで破顔は感概ひとしおであった。

（石川　白湫）

公告

財団法人日本船舶振興会昭和五十六年度補助事業「俳句教室の開催」事業は、昭和五十七年三月十五日に完了いたしましたのでお知らせいたします。

〒160東京都新宿区百人町三―二八―一〇
社団法人　俳人協会
会長　大野　正

俳人協会創立二十周年記念 東北俳句大会

俳人協会員でない一般の方も投句・出席できます。多数ご参加下さい。

日時　昭和五十七年五月二十三日（日）十一時三十分
会場　宮城県民会館第二会議室六階
仙台市国分町三―三―七
電話〇二二二―二五―八六四一番（代表）
投句　二句一組（当季雑詠・未発表に限る）
投句締切　当日十二時三十分
投句料　千円（選集代を含む）
講演　沢木欣一・古舘曹人・村田脩・遠藤梧逸・柴田白葉女
選者　沢木欣一・古舘曹人・村田脩・遠藤梧逸・柴田白葉女・八木沢高原・村上しゅら・小原啄葉・安藤五百枝・秋沢猛・福原十王・門脇白風・古内一吐・鈴木貞二・蓮田紀枝子・山田十四吉（順不同）
賞　俳人協会大会賞ほか
主催　社団法人　俳人協会
後援　河北新報社

俳人協会創立二十周年記念 京滋会員の集い

京都府・滋賀県在住俳人協会員の句会と懇親の集いです。関西他府県の協会員のご出席もお待ちします。

日時　昭和五十七年五月三十日（日）午後一時
会場　京都大学・楽友会館二F大会議室
句会　三句投句、五月十日までに返信葉書で世話人宛
懇親会会費　五千円（昼食代）
選者　阿波野青畝・森田峠・村山古郷・草間時彦・桂樟蹊子・猿橋統流子・那須乙郎・浜明史・藤本映湖・松本三余・丸山海道・三野青芒子（順不同・一部交渉中）
連絡先・世話人　〒602京都市上京区下立売通七本松東入
桂　樟蹊子
主催　社団法人　俳人協会

俳人協会創立二十周年記念 四国俳句大会

俳人協会員でない一般の方も投句、出席できます。多数ご参加下さい。

日時　昭和五十七年六月六日（日）
受付開始午前十一時　開会午後一時
会場　松山市立子規記念博物館
松山市道後公園一―三〇
電話〇八九九―三一―五五六六
投句　二句（未発表に限る）
投句締切　当日午後零時半
投句料　五百円
講演　尾形仂・能村登四郎・後藤比奈夫
選者　能村登四郎・後藤比奈夫・草間時彦・佐野まもる・高井北杜・三浦恒礼子・高橋柿花・川口淀村・佐伯巨星塔・篠崎圭介・谷野予志・宮内むさし・村上杏史・吉野義子（順不同・一部交渉中）
賞　俳人協会大会賞ほか
主催　社団法人　俳人協会
後援　愛媛新聞社

創立20周年を迎えて

俳人協会会長 大野林火

〝18人の同志〟で発足

二十周年の歩みというものを私は私なりの気持を混えながら少しお話しいたします。

俳人協会の設立は三十六年十二月二十一日です。暮の押し迫った時に何故設立総会を開いたかといいますと、普通なら、年を越してやるべき事だろうと思います。それは、先輩の示した目標が現在まで続いて来たという事にも関連してくるのですが、実は、現代俳句協会というものが生まれました。二十二年と思いますが、亡くなった西東三鬼さん、石田波郷さんらが中心になりまして、主旨は、現代俳句の普及、顕彰等でございます。ここにご出席の中にもその現代俳句協会賞を受賞なさった方が何人もいらっしゃいます。

そのように回を重ねておりましたが、いろいろな問題がありまして、我々俳人協会の設立総会に加わった十八人の者は、俳句というものを季題と十七文字に一線を画しまして、その中で可能性を探るという考えです。ところが、その頃の現代俳句協会は無季俳句容認という事になって参りました。そのような事が結局、現代俳句協会を脱退して急きょ俳人協会を成立しようという事になりました。

これはこの年の現代俳句賞が問題になりまして、それで暮の十二月二十一日に俳人協会を設立し、俳人協会として考えておる俳句の俳人協会賞を誰に与えるか検討致しまして、第一回は石川桂郎さんに決ったわけです。従って、現在もこれからも、有季定型が大きな柱となっています。勿論、事業その他は違いますが、根本として我々の集まりには有季定型が入っております。ですから、最近出しました「俳人協会賞作品集」の方は全て有季定型を守っていらっしゃる方です。新人賞も勿論そうです。今後も、守ってゆかなければならないことだと思っています。

飯田橋の大神宮さんの隣に、大松閣があるんですが、そこの畳の間でしたが、十二月二十一日に十八人集まったんです。会員は、現代俳句協会を脱退した三十人ですが、現在の人数からいいますとまるでおかしな人数ですが。三十人中十八人も集ったんですから、りっぱなもんですけど…。（笑）

皆、新しいものを作るという意欲に燃えていました。その結果、三十七年の五月二十六日に第一回の総会を開きまして、ここで会長に水原秋櫻子先生を仰ぎました。これもちょっと突然のようですが、現代俳句協会を創った時に遡りますと、もう水原先生とか山口先生は神棚へ置いておこうと、若い者だけでやろうじゃないかというのが戦後、現代俳句協会を作った時にありました。

しかし、その事はやはりおかしいので、俳壇の最長老でしかも現代俳句を育成してきた方々を蔑にすることはないんで、水原先生を会長に、富安風生先生にも入っていただくという事で第一回の総会を開きました。その時の会員が一五三名。でも、三十六年の十二月二十一日に発足して五ケ月ばかりですが、一五三名になったという事はなかなか立派なもんです。水原先生に長いことお世話願い五十三年の二月まで、我々をご指導下さいました。五十三年三月からは、名誉会長に仰いで最高の指示をお願いしたわけです。

協会ができて一番困ったのは、何といいましても場所なんです。協会ができても住家がないんでは困るので、事務所をどこに置くか大きな問題でした。勿論、一軒家を貸りる程一五三名が金持じゃありませんから、どこかの事務所を借りなきゃならない。これが、まあ、極端にいえば、只の所を貸りなきゃいけない。これが、最初のうちの苦労でした。ですから、角川書店の一つの机を時々借りたりしましたが、角川書店もごたごたしていて、忙がしい所でもありました。

我々が集まれるような所が欲しいと思っていましたが、千駄ケ谷に日本デザインスクール、今、俳人協会の評議員をしておられる堀喬人先生がここの校長をされておりましたので、そこを借りてしばらくやっていた事もあります。大阪から、米沢吾亦紅先生がわざわざご上京なさってこの会には加って下さったこともございました。でもそこも――学校の校長室を長いこと借りてるわけにも参りませんで、それから、今、ここにお出になっておられる清水径子さんのお宅をお借りした事もあります。ま、清水さんにはいろいろ煩瑣な事務の処理をしていただきまして、清水さんのお宅にずい分長いこと事務所がありました。

さらに続いて事務所の移転だけを申し上げますと、銀座に松崎鉄之介君、今理事をやっていますが、事務所がありまして、ここにも厄介になりました。ま、転々と歩いておりまして、皆家賃が只でして（笑）、だから骨が折れたわけです――御迷惑だったろうと思います。

我々が初めて自分の事務所を持てるようになったのは、昭和四十七年の一月です。新橋の烏森ビルの六階だったかと思います。雑居ビルです。

記念式典で挨拶する大野会長

匂う百円札の思い出

我々初めて入った時は、広い所へ入ったなと思ったんですが――自前ですから、狭くても我家ですから――二十人は入れなかったでしょ、机を入れたりして会合をしたりすると。十四、五人だったと思います。でも、自分のものになったんで気持良かったです。これは勿論家賃を払ったんです。

それと並んで、俳人協会が社団法人化しました。その認可をいただいたのが、昭和四十六年十二月十七日になります。その前に設立総会がありまして、ここで社団法人俳人協会の初代会長に水原秋櫻子先生におなりになっていただいて、秋元不死男、私が副会長で、理事長に安住敦がなりました。四十八年になって、これは、我々俳人では考えつかないことなんですが、角川源義さんが「俳句文学館を建てようじゃないか」という事から、自前の建物を持ってそこに、図書を集め、俳句資料なら何でもあるという考えを持ったんです。

俳句というものは、作っていて、おしゃべりしてればいいと思っていた仲間の中で、とんでもない話が持ち上がったもので、一時、戸惑ったんですが、そりゃ当然そういうものがあれば結構なんで、皆賛成しましてその後建設委員会等作ったりしました。そして四十九年十二月、俳句文学館敷地が現在の所へ認可されました。皆さんのお世話になりました。

文化庁はいうまでもなく、角川さんは勿論ですが、水田三喜男先生、富安風生先生、水原先生――。私も、富安先生のお伴をして、大蔵省や文部省を歩いたこともあります。とにかく十二月二十八日起工式となりまして、五十一年三月二十八日に俳句文学館が創立されました。国からの補助もありましたが、それこそ、名実とも自分の家ができたわけです。

事業としましては、いろいろございまして、たとえば、朝日新聞後援の全国俳句大会にしても、過去を思えば大変でございました。

事務所がないんですから、予選をするのにもどこかへ行ってやらなければならないと、本選をするにもどこかへ行ってやらなきゃならない。そんなこと全てを清水径子さんがお世話して下さいまして――大勢が行って、また俳人というのは、いろいろ好みがありますんでね――甘い物が好きな者もいれば、辛いものが好きなのもいるから、そういうのを適当に清水さんが買い揃えて下さった。弁当の手配から寝床の心配までしてくれました。

秋元さんの所が全国大会の受付でしたが、その頃は、確か百円だったと思います。小さい赤いような札。札というのは一枚だとそう匂わないんですが、ことに一万円札などは割に匂わないんですが、少額紙幣になってしかもそれがいっぱいだと相当な匂いだと思います。清水さんは、それを整理して郵便局に持って行くと、「こんなに少額紙幣を預金するとは、一体あんたの所では何をやってんだ」とそういわれたこともあったそうです。今になってみると一つの想い出話になりまして、笑い話です。当時の担当された方々は非常なご苦心だろうと思うし、大変に骨が折れたことだったと思います。

我々理事がやや胸を張っていえるのは現在に至るまで、俳人協会から報酬をもらっていないという事なんです。今でこそ、少ないんじゃないかと思いますが御車代をくれます。電車賃を払ってコーヒーを飲むと終わりでしょ――（笑）それもこと、二、三年のことです。それまでは、交通費も昼食もコーヒーも全部自費。会議をして、寒い中、帰ったこともありました。そういった事が現在に実を結び、我々も却って懐しい位です。

現在は、順調に行きまして、欲を言ったらきりがありませんが、財政面も可もなく不可もなく、さし引きゼロなんていうのは俳人の集いとしてりっぱなもんだと思います。そりゃ文化庁にもおほめいただいていいことだと思っております。

現在、俳人協会賞・新人賞・評論賞・全国俳句大会も行なっております。これは関西でも行なっております。丁度、全国大会が東京で二十回、関西で十七回、この他に、だいぶ前のことですが、懇親吟行会をやろうという話がおきました。そして第一回を確か鎌倉の建長寺でやった事を覚えています。これは俳人協会というものが独善的な、俳句の好きな、いささか俳句きちがいの集まりと思われてはいけないということで、俳句というものを一般に普及することが一つの大きな目的にもなっております。

それが現在、各地方大会になり、各地の地方吟行会になり、さらには、会員の集いとなって実を結んでおります。俳人協会が今大事に思うのは、やはりそこいらにあると思います。

先ほども桑原さんが「出雲俳壇の人々」というので受賞されましたが、俳句は風土に根ざした詩ですから、各地に各地の俳句があってよろしいわけです。それと中央といかに結ぶかという事は、それこそ俳人協会のような組織がなければできないことです。ですから、今回、二十周年記念事業としてやりますことについても、俳人協会はこういうものだと、そして皆様方と一緒に伝統の俳句を守って行くのだという事を普及する意味もあって、北海道から九州まで各地方で、大会を開き、講演をさせていただき、それを通じて地方の方と近密な連絡をとって行こうという企画です。

想い出はいくつもありまして、それを話しますときりがないんで、これはまた何かの機会に話します。

こういう盛大な二十周年ができようとは、大松閣に集まった十八人は誰も思ってなかった。夢のようでございます。関係各位、会員諸君のご支援があったからできた事だと思います。では、これでもって挨拶とさせていただきます。

記念懇親会の会場風景

協会の発展を祈って（挨拶代読）

本日俳人協会の創立二十周年記念の式典が盛大に催されましたことを心からお慶び申し上げます。

この目出度いこんな意義ある席で表彰して頂き大変面映ゆく感じながらも恐縮しています。関西支部が何とか本部に協力が出来て来ましたのは、何も知らない一面識もなかった私を支部の委員の皆さんが、何の不平もいわずに黙々と助けて協力して下さったからで、私は今でもそのことを感謝しています。

私は先年来体調が思わしくなく支部長を退かせて頂き当時の水原会長に迷惑をおかけしましたが、そのあとを大先輩であります阿波野青畝先生がお引き受け下さいましたことを感激し且つ恐縮しています。ご人格円満な先生は、水原会長の要請でありますと協力しないわけには行きませんと、爾後ずっと支部を率いて下さっています。そして軌道に乗った発展をつづけていますことを喜んでいます。

こうして俳人協会が今後とも益々発展して行きますことをお祈りしながら言葉が足りませんがお礼とさせて頂きます。

昭和五十七年二月二十七日

米澤吾亦紅

感謝状を受けた二氏

米沢氏（上）と清水さん

米沢吾亦紅氏

本名忠雄。明治三十四年長崎生まれ。九大工学部卒の造船技師。大学在学中から俳句を「天の川」に学び、大学卒業後、水原秋櫻子に師事。馬酔木同人、燕巣主宰。俳人協会創立後、関西での活動の中心となり、自宅を関西支部事務所とし、初代支部長となった。昭和五十年、病気のため辞任。

清水径子氏

秋元不死男門。協会創立時より事務を手伝い、昭和四十三年から五十四年までは自宅を協会事務所として、献身的に事務局の責任者として奉仕した。氷海同人を経て現在「琴座」に参加。

俳人協会創立二十周年記念 広島俳句大会

広島を中心に、山陽三県が行なうものです。俳人協会員でない一般の方も投句・出席できます。多数ご参加下さい。

日　時　昭和五十七年七月二十五日（日）午後零時半

会　場　広島市広成ビル六階大会議室（広島市東区上大須賀町一―一電話〇八二―六三―九〇四九）

投　句　二句（未発表に限る、一人一組のみ）

投句締切　当日午後零時半

投句料　五百円

講　演　清崎敏郎・鷹羽狩行

選　者　安住敦・清崎敏郎・鷹羽狩行・赤松憲子・梶井枯骨・石井青歩・田淵十風子・林檄・藤井亘・藤井艸眉子・宮原双馨（順不同、一部交渉中）

賞　俳人協会大会賞ほか。

◇懇親会

大会終了後、講師・選者を囲み懇親会食を致します。協会員外の一般の方は直接左記宛、またはお知り合いの協会員を通じ御申し込み下さい。準備の都合上必ず予約とし、当日の申し込みは受け付致しません。

申　込　先　〒730広島市東区二葉里二―四―一〇　宮原方　俳人協会広島支部

申込締切　六月三十日

懇親会費　五千円（当日受付にて納入のこと）

主催　社団法人　俳人協会
後援　中国新聞社

昭和五十七年春季 俳句文学館俳句講座

期　間　五月七日～六月四日まで　毎週金曜日　五回

会　場　東京都新宿区百人町三―二八―一〇　俳句文学館　電話　三六七―六六二一

道　順　国鉄・大久保駅西口（中野寄り）下車、徒歩四分

定　員　八〇名

会　費　〈一般〉（全期間）四、〇〇〇円　（一日券）一、〇〇〇円　〈協会員〉三、五〇〇円　八〇〇円

申込先　〒160　東京都新宿区百人町三―二八―一〇　社団法人　俳人協会俳句講座係

会費同封（一日受講は期日を明記）

協会員は姓号の肩にその旨明記の上、現金書留でお申込み下さい。受講券をお送りします。

演　題　講師ならびに時間割

〔俳句講座賞〕　全期間受講申込者に対し、第二日に雑詠三句募集、最終日に入選発表授賞を行います。

全回受講者には受講証を発行します。

日／時間		一三時～一四時十五分	一四時三〇分～一五時四五分
5月7日	(金)	気象と季語　三谷いちろ	自句・自解　鈴木真砂女
5月14日	(金)	添削の是非など　宮下翠舟	俳句の基本　沢木欣一
5月21日	(金)	季語深耕・雀　小林清之介	我が角川俳句賞作品　磯貝碧蹄館
5月28日	(金)	写生について　成瀬正俊	自然と実作　野沢節子
6月4日	(金)	自作を語る　及川貞	俳句講座賞と講評

ひとことと

地方会員にもスペースを
佐々木露舟（帯広）

中央のことは総合俳誌などで知ることができるが、地方会員の動向がなかなかきかれない。今月は北海道、来月は九州というように会員の投書による一部のスペースを割いて頂きたいと思います。

また同じ地方にしても片寄らない分布も考えてほしいと思います。

「私はこの一月、初心者づくりに『露舟俳句教室』をつくりました。通行の人のためにも〈俳句のポスト〉を設置し通信も可とするので目下関心を集めて居ります」

ザラメ雪と堅雪と
田湯　港（北海道）

北海道も三月となると、日中の日差しはかなり強くなるが、この強い日差しを受けた雪は徐々に解けはじめ、水分を含んでザラザラになる。この状態の雪を「ザラメ雪」と言っている。

また、この水分を含んだ雪が、夜になると氷点下二、三十度と言った気温の低下によっていわゆる「シバレ」た状態となり翌朝は、人はおろか馬が歩いても足跡さえ付かない程となる。これを「堅雪」と称しているが、「ザラメ雪」「堅雪」ともに歳時記には載っていない。

〝俳句文学館〟を旬刊に
土橋　慶民（北海道）

地方の結社の中で俳句を創る者は、中央圏で活動するより情報量に乏しい。実際には作句上には情報そのものは必要ないわけであるが、現在の社会情勢では、いろいろな情報を入手することが大切であると考える。

「俳句文学館」が、公平・正確な情報源であり、交流の広場であると考えるとき、「俳句文学館」が、月に二回、三回と、それぞれの地域の俳句文学の振興を促す目的と使命観をもって発行されることを願うものである。

田舎者には
榛谷美枝子（札幌）

俳句文学館が完成してまもなく夏草同人会の集まりで出席して見学いたしました。その時感じましたことは、上京の度に気軽に伺ってみたいと思いました。

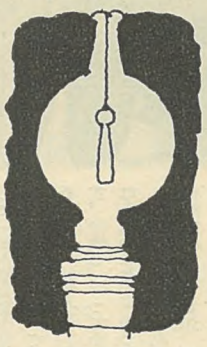
しかしその後、年に四、五回上京いたしましても、なかなか足がそちらへ向きません。道順が田舎者には不明な点と、何か特別の用もないのに伺ってはという気持もあります。美術館へは行き慣れて

認識と自覚と
高橋　正一（東京）

俳句の座興性と高尚性のバランスが座興性に傾くと、俗化の危険信号となる。その点、俳人協会の各種の講習会・顕彰事業は、俗化頽廃の歯止めとして有効な運動である。

蓋し俳句大会等の褒賞は度が過ぎると功名心を煽り、真の俳句の文徳を見失う虞れ無しとしない。だが講演会の付帯は最良の啓蒙であろう。

子規は功名心の権化であったが、主義主張の文学理論確立のためのものであった。木下李太郎が文学と医業の狭間で悩んだ時、森鴎外は「俗と知って俗と交ること俗に非らず」と答えている。蘊蓄のある言葉である。俳人とて俗の認識と自覚は、終生の命題と言えるであろう。



百に一つ
花岡　花人（東京）

特集「ひとことと」への執筆依頼は、百人に一人の無作為抽出とかで、お年玉付年賀葉書を貰ったような気持である。

日頃、ビジネスのやりとりの中でも俳句好きには時々お目にかかる。

いろんな職場でグループ俳句が盛んなようだ。協会もこういうグループと仲よくやっていくことを考えてはどうであろうか。百に一つでもよい。

謦咳の保存を
三宅　隆（東京）

先人の論旨など（座談会などのもの）その場に居合わせていないかぎり、伝えて貰うのはすべて活字と写真（記事）によっている。

「謦咳に接する」という意味からもそれをテープで保存し、後人に聞かせて貰いたいと思う。それも講義風のものより、座談的なあるいは選評的なものがいいと思う。

というのは普段のさりげない話しっぷりにその人柄が「にじみ出よう…」と思うからだ。極端な話〝屋台で二杯〟なんていうのが集録されると、尚いい。

文学館と酒場
すずき春雪（小平）

「太平山」「灘平」は大久保駅前にある酒場の名である。毎月第一日曜日に「狩」の東京句会が俳句文学館で行われているが、句会が終ると必ずといってよいほどこれらの酒場に寄ることにしている。

こうゆう楽しみがあるから句会のある日は朝からそわそわして落着かない。月に一度の逢う瀬をまるで飢えているかのように、冬は熱燗、夏は冷酒を酌み交しながら、とめどない俳句の話に熱中するのである。俳句を通じての心と心の触れあいの大切さをしみじみと感じるのはこうゆうときである。

俳句文学館と共に、この酒場は私にとって生涯忘れることの出来ない良い思い出の場所になるであろう。

図書室は我が書斎
片岡慶三郎（横浜）

初めて俳句文学館の図書室を利用したのは自分の句集を作ろうと思った五年程前の時です。初期の頃の句稿が手元になかったので図書室通いをし蔵書となっている俳誌から抜萃して雑なく編集が出来ました。また独自性を尊ぶ句集名も人様のものと重複しないよう蔵書カードも調べました。

私共個人の俳書、参考書等の手持ちは無いも同然でその数はたかが知れています。文学館図書室は会員私達の書棚の延長と思って今後も必要な時に利用させて貰います。

忙事雑感
八木　浩子（川崎）

主人が桃の花を買って来た。雛の無い我が家の桃の節句である。

子供は「月が美しから覗いて見たら」という。時折主人や子供が家中を花で飾ってくれる。家事と商いの大多忙の中で、句会や吟行に行けない私への家族の思遣りは、有難い事である。静かな四季の中で生活してみたい憧れは大きい。

しかし此の喧騒の街に住み家族と共に在りながら、平凡な人間として私なりの一句に今日も精進したい。

そして生涯の中でいつか、見事な我が一句に出逢える事を、望んでいるのである。

月刊俳句文学館について
大川　茂登（茨城）

月初め俳句新聞が到着すると、わくわくする思いで帯紙をはづし心を鎮めて紙面を開く、私の敬する俳句界のその月のニュースを識り、また、季節の秀句は心の琴線に触れ、魂の高鳴りを覚える。

紺の厚表紙に綴込むとき「俳句文学館」の浮き立つ様な朱文字は新鮮で心温まる思いで私を包んで仕舞う。私の俳人協会入会の喜びも、風生・秋櫻子先生御逝去の哀しみも、この新聞綴りの中に納まって、俳人協会歴史の馨りとなっている。

寸感
石井　花紅（横浜）

季題のもつ神秘、それが互に織りなす種々相は深遠無辺である。

永年季題感に徹せよ、と厳しい鞭を喫してきたが、実相観入の如何に至難であるか、常に身を削る思いである。今や俳壇は隆盛を極め、その作品の数も膨大である。その価値感は、格調は、果してどうなのか、隆盛の陰の質の低下は許されない。要は、自然の奥底、まことに参入同化することであるが、作者自身まず「まこと」に徹する人間修行が先であることを厳しく受け止めるべきである。

せまき門
田口きし代（東京）

いつ雪に変るかわからない様な雨の中、期待と不安のまざる気持で孫と二人、高校合格発表を見に出掛けました。七百人の瞳が必至に探そうとするその合格番号発表用紙は、校庭の隅の掲示板にいともちんまりと小さくはられていました。

六十人の合格者番号はまるで片手の掌にのる様な少なさ、必至の祈るおもいで、一つの番号を探すあつい視線も何度見直しても、二分とかからない様な中からは、目ざす番号は終いに見当たりませんでした。

一生けんめいに頑張ってきた七百人の中の六百何人かの少年少女は、この瞬間に無念の涙をのんだことでしょう。無口になった孫の背中をたたいて、雨のあがった樟並木を何ともやるせないやりきれないおもいで、バスに乗った二人でした。

女性の進出
加藤憲曠（八戸）

最近、女性の向学心の旺盛さには瞠目すべきものがある。俳壇にしても俳句大会、句会等での上位入選者は殆ど女性に占められるようになった。世の男性たるものこことで褌を締め直し頑張ってもらわねばなるまい。青森県では、現在俳人協会の会員が三十人、そのうち女性は四人だけである。

昨年から仲間と俳人協会の会員を増やすべく話しあっているが、実力のあるものは圧倒的に女性である。この分だと結成の際本部から派遣される特別選者には女性を願わなくてはならないのではないかと思っている。

ひとことと
赤松　萩露（山形）

俳句産業と言われるまでに現代を風靡してしまった庶民文芸の俳句、俳句より大衆性を取ってしまったら凡そ意味なきものになる様な気が致します。

また一面に俳人とは、特殊な人達の集団とも言われる程俳句結社の結合も固い、不思議な現象です。中央には俳壇、地方には俳衆、言いたいことは何も俳句まで中央集権的なものに作りあげる必要もあるまい。

大衆文芸の俳句に象牙の塔をおっ立てるような御指導だけは御免して下さい。地方俳衆に、もっともっと連帯プレーを願います。御苦労を多謝致します。

坂東太郎と私
内田　幸子（東京）

水郷佐原、利根の河畔に数年住んでいた。

早春、両岸の土堤が青むと共に聞えてくる雲雀の囀り。夏は河原の花火大会。猟銃音で開ける十一月。筑波嵐に枯葦が揺れる。利根の句には事欠かなかった。利根の句ばかり作った。坂東太郎に足を向けて寝られないと思った。利根川で〝俳句開眼〟とは少々言い過ぎになろうか。

水郷を去って七年経つ。喧噪の東京にいて、坂東太郎の雄姿を懐かしく思う。

恵まれた俳句入門
北沢　里人（東京）

昭和十二年七月、当時私が勤めていた会社に小さな俳句会が誕生した。これは社長の田辺九品郎（隆二）さんの要望によるもので幹事の一人に私も指名された。

指導者は富安風生先生で、先生へは九品郎さんが頼んで下さった。九品郎さんと風生先生の句はずば抜けており、風生先生のご講評が実にすばらしいので、毎月の句会が楽しみだった。

これが私の誠に恵まれた俳句入門であった。

それにしても、今は亡き九品郎さんと風生先生が偲ばれてならない。

俳人協会にサロンを
小菅　高雪（東京）

俳句文学館に俳人のサロンがほしい。私はいつもそう思う。

俳人協会の周辺は、どこかの句会帰りの人や買い物客ばかりで、のんびりと話をしたりくつろいだりする人がいない。またその場所もない。

俳句文学館には、特別の用事や行事がなくても、もっと各結社の人が集まるようにしたい。むしろひまだったら集ってゆくような場所にしたい。

俳句文学館を事務所からサロンに変えてゆきたい。そうなれば、もっとすばらしい、楽しい場所になるだろう。

わが一句
後藤　草浪（東京）

僕の家は古今亭志ん生の家に近かったので、病後の志ん生が弟子に扶けられながら銭湯に通う姿をよく見かけた。僕も風呂が好きで四季を通じ日のある内に入浴する。

そろそろ湯にでもと机の上を片付けていると目の前を燕が行き違った。そこで打座即刻に

志ん生の通ひし湯屋の燕の巣

の句を得た。ところが他日その銭湯の前を通ると、コインランドリーの増築ですっかり様変りしてしまって燕の巣は跡形もない。そんな訳で証のない今あらためてこの一句に虚実皮膜をおもうのである。

批評と論争の場を
柴田　敏雄（東京）

俳句には文学と大衆芸事の両面があり、最近の俳句人口の増加は後者の繁盛に関わり、前者の衰弱に繋がっています。文学と大衆芸事を区別するものは批評と論争の有無ですが俳句結社にこのことを期待するのはその閉鎖性故に困難です。とすれば俳人協会がこの二つの活動の場を提供する他はありません。

結社の枠を超えて、俳人達による公正な文学活動のみが俳句を文学として蘇生させることができる筈です。

月刊俳句文学館について
大川　茂登（茨城）

月初め俳句新聞が到着すると、わくわくする思いで帯紙をはづし心を鎮めて紙面を開く、私の敬する俳句界のその月のニュースを識り、また、季節の秀句は心の琴線に触れ、魂の高鳴りを覚える。

紺の厚表紙に綴込むとき「俳句文学館」の浮き立つ様な朱文字は新鮮で心温まる思いで私を包んで仕舞う。私の俳人協会入会の喜びも、風生・秋櫻子先生御逝去の哀しみも、この新聞綴りの中に納まって、俳人協会歴史の馨りとなっている。

会費ご納入のお願い

○蘩悲心鳥翔ゆく霧に田を植うる

では、選者が全句に目を通していない。選者が全句に目を通している。

告白となってしまった。

俳人協会会員著書

著者名・書名・発行所・定価の順

昭和五十六年四月刊行

沖山智恵子　句集　初凪　鹿火屋会　二〇〇〇円

昭和五十六年七月刊行

津田　清子　句集　礼拝（改訂版）　沙羅俳句会　ナシ

昭和五十六年十月刊行

川瀬　一貫　句集　紅仙　同人社　二五〇〇円
細川　加賀　自註現代俳句シリーズⅢ～31　俳人協会　八八〇円
菊池　麻風　自註現代俳句シリーズⅣ～20　俳人協会　一〇〇〇円
福原　十王　自註現代俳句シリーズⅣ～42　俳人協会　一〇〇〇円
笹川　菊子　句集　菊帖　玉藻社　二〇〇〇円

昭和五十六年十一月刊行

内田まきを　句集　田舎教師　竹頭社　二三〇〇円
岡本　麻子　句集　放生　諷詠会　非売品
小倉玲羊子　句集　繍線菊　春郊社　二〇〇〇円
佐藤　春子　句集　命毛　牧羊社　一七〇〇円
徳永山冬子　渋柿俳句入門　渋柿社　一五〇〇円
中山　鼻月　句集　福耳　柿発行所　非売品
村上　杏史　句集　朝鶴　東京美術　一〇〇〇円
河口信一郎　句文集　冷奴　著者刊　ナシ
藤松　遊子　現代俳句選書㉚　人も蟻も　東京美術　九〇〇円
林　翔　自註現代俳句シリーズⅢ～26　俳人協会　八八〇円
雨宮　昌吉　自註現代俳句シリーズⅣ～3　俳人協会　一〇〇〇円
大津　希水　自註現代俳句シリーズⅣ～13　俳人協会　一〇〇〇円
林　昌華　自註現代俳句シリーズⅣ～37　俳人協会　一〇〇〇円
住吉　青秋　句集　大桑　雪解発行所　二〇〇〇円
多田　薙石　句集　潮華　竹頭社　二三〇〇円
岡本　庚子　句集　葛の花　丸の内出版　二〇〇〇円
星野　立子　玉藻俳話（再版）　玉藻社　二〇〇〇円

昭和五十六年十二月刊行

長倉　義光　句集　小手毬の花　みちのく発行所　二五〇〇円
江口　千樹　現代俳句選書㉙　旅信　東京美術　九〇〇円
千葉艸坪子　句集　牧五月　みちのく発行所　ナシ
平井　照敏　評論　現代俳句の論理　青土社　一八〇〇円
野村　浜生　句集　足柄　河発行所　二五〇〇円
三浦美津子　現代俳句選書㉛　水脈　東京美術　九〇〇円
加倉井秋を　自註現代俳句シリーズⅡ～11　俳人協会　八八〇円
樋笠　文　自註現代俳句シリーズⅣ～40　俳人協会　一〇〇〇円
村沢　夏風　自註現代俳句シリーズⅣ～51　俳人協会　一〇〇〇円
辺田　夕峰　句集　浦住　若葉社　二五〇〇円
荒谷としを　句集　ダムの蝶　駒草発行所　一八〇〇円
泉　紫像　句集　加賀梨　萬緑会　二〇〇〇円
迫　牛彦　牛彦遺句集　迫　光江刊　ナシ

特集 ちょっと

俳句と私
深津　叔男（土浦）

「季の文学から人間の文学へ。季語にたよらず、日常それによって思考し実感している現代のことばで書くべきである。無償の文学に違いないが、俳句は私という個の表白であり、私なりの生活を詠みこんでいきたい」とは若いころの私の主張であった。

このごろは、所属する結社とてなく、発想のおもむくまま、このひと筋につながっているというところである。

酒のない日はなくても句のない日が多い私にとっての俳句とはなにか。またひとしきり句心をかきたてなくてはなるまい。

待ち時間
名倉　光子（埼玉）

昔、力士は「一年を二十日で暮すいい男」といわれた。俳句に熱中し始めて、俳人とは一年を五百日にも六百日にも使いこなす凄い人々だと気づいた。

若い頃、心浮きたった待ち時間も、不安が先立つ苛立たしい時間になっていたが、何時か、心浮きたつ時間に逆戻りしていたのには驚く。

夫や子の帰りを待つ間、友と待合せる間、雨音に「春浅し」と書き、線路の陽光に「風光る」と口ずさみ、不老長寿の媚薬ならぬ句を噛み噛み、待ち時間の長からん事さえ願う。此の変りよう。感謝のほかはない。

感ずるままを〝ひとこと〟
羽鳥　憲人（大宮）

全国俳句結社を束ねて行くことと、当局に感謝している。以下感想。

一、会費が高額に過ぎはせぬか!!

新会員を勧誘するにも、これが頭痛の種となる。

二、連絡通信が一片の紙切に等しいものでは物足りぬ。これが充実策に御一考を乞うとお願いする。

三、俳人協会編、俳句集の重さ!!費用を多額に出しても、其の結果の句集の利用。つん読に終らせぬ考慮……。

四、俳人協会会員の処遇。むつかしいとは思うが、何かないか?

俳句大会の予選に異議あり
中野文夫（蓮田）

最近大きな句会となると、必らず一部の選者に依り予選というものが行なわれている。

果して俳句には予選というものが可能なのであろうか? 結社内の句会においても、主宰と同人級の選とでは一致しないという方が適切である。

聞くところによれば、朝日俳壇では、選者が全句に目を通しているといわれている。一人一句でも良い、投句者全句に選者が目を通すことは出来ないものだろうか。

古壷新酒
萩原滴生子（志木）

虚子先生の「虚子俳話」の中に「古壷新酒」という言葉がある。説く語意も分らぬままに二十余年が経過してしまったが、昨年小句会の席で「俳句の形は古く、なかの句は新しく。」と私は選者に諭された。

その時長らく解けず低迷していた虚子俳話の教えが漸く解けた思いがして、その悦びは今までにないことであった。しかしさて、俳句に表現するとなると何と難しい業かと痛感している。自然に体得するより他にない。私の不勉強の告白となってしまった。

言葉の道
新井　盛治（桐生）

最近の生活の中で特に国語の乱用には呆がとさせられる。暗に数を強いる第三種郵便物認可規正の影響かは知らぬが、詩歌の分野まで其の波及は例外でない。俳句も死語に近いものを歳時記から除く作業もあろうが、現況の大波の前には物の数ではあるまい。

時勢が生む新語は否定せぬが余り性急な妥協は危険である。次の世代のためにも選者及び編集子の責任は大きい。要は安易な妥協を慎しむべきで、こうなると事は俳句以前と云う問題に立入らねばならない。

俳句有縁
柴田　東子（岡崎）

協会創立二十周年の進展とその同じ歳月での私自身の俳句との関わりを憶うと人との出逢いもまた、作品以上に興味深い。俳句の世界に身を擱かなかったら相逢わずに過ぎたであろう人達との「縁」を考えるとそれは経にも緯にも際限なく繋っている。

緯の方は日頃、研鑽し合う友人達であり、国内は元より海外にも縁が生まれてゆく。経の縁は私の祖母が若い時から句会を我が家で持つ程であったから母も、そして私も極く自然に作句しだしたと言える。血縁を一層濃くしているのが俳句なのである。

俳句の文字
岩田　元子（名古屋）

「家が傷む」「腰が痛む」いためと同じ発音ではあるが随分と違った意味の字である。字数の少ない俳句では殊に重要な事ではなかろうか。これに似通った文字や言葉はもっと沢山あるであろう。

字句の持つ意味の深さを思うと迂闊にものを書けないような気がする。俳句を作るからには充分注意をして適切な文字を選び使いたいと思います。

近頃嫌なこと
村松　恵峰（中津川）

俳壇の代表的な俳句雑誌二社がお互いに形を変えては相手を悪しざまに言い合うということは、まことに見苦しい限りで、この際やめてもらいたい。

権力、利害打算の伴わない純粋な世界であるからこそ価値があり人々は希求するのである。良い意味での論争とはとても思えない状態にみうけられた。両者ともに、このことに対し、眉をひそめているまじめな多数の作家たちがいることを忘れないでほしい。

俳人
川井美津子（熱海）

伊豆の私共の小さな旅館へも、折りにふれて、俳句の方が訪れて下さる。「何かお気に召さなかったのでしょうか。お着替えもせずに、お客様がすぐ外出してしまわれましたが」と店の者が心配して、御注進に駆け付ける。

その方は福田蓼汀先生であったり、また秋元不死男先生であったりする。有名な方にかぎらず、どなたも厳しく自然にたちむかって、真面目に吟行に勤しむ、その在り方は俳句をなさる方々の共通点であり、私が尊敬申し上げる所以でもある。

俳人協会と地方俳人
和田　孝子（天竜）

俳人協会の設立、俳句文学館の開設といっても、地方俳誌に所属する者にとってはあまり縁がない。辛うじて繋がりをもつ中央俳誌からの推薦で入会した協会費を納入することは、今日の俳句作者としての義務と考えているのが偽らざる心情である。

中小都市や農山村に於ける俳句活動は、生業や家族の制約が妨げとなって、殊に中年層にあってはその志を断念する者もすくなくない。限られた時間に身近な仲間が集り相互の作品の向上につとめているのが精一杯の現状である。

俳句の先生とは
伊藤啓山人（春日井）

わが俳壇において先生と呼ばれ先生と呼んで、天下に恥じざる俳人が何人いるだろうか。私の見解では、中央地方を通じ少なくとも「俳人協会」の会員以上の人、それに角川の「俳句年鑑」に年々俳人として登載されてしかも不断俳句活動をされている三千七八百名の方々だけだろう。

ところが結社よりすれば年々物故俳人の穴埋め的に同人、または会員に推せん、之も萬止むを得ぬ事だろう。昨年こんな例があるので「ひとこと」筆を取った。同人の推せん規定は大結社ホトトギス、若葉は別として、普通は五、六年らしい。例外は別としても。

作品よりしてその実力を買い五年足らずで私が「獺祭」同人に推せんした。するとその「新同人」氏の関係結社は直ぐさま同人に推せんその上俳人協会の会員にも推せんした。

一面推せんせられた新同人、新俳人協会員氏は、一躍先生になったものの体裁が悪いのか良心が許さぬのか、それ以来投句はするが例会にはほとんど出ないようになった。これは如何なるものか。文学に年齢、序列はないといえども一考を要したい。

私は昨年十一月三十日名古屋の商工会議所にて大野会長にお逢いして以来の御無礼をお詫びして、筆をおく。

思い出の一句
木村　喜香（吹田）

女学生の頃、五十年近く前でございましょうか、友人の父君の句会に誘われて作った一句、『庭石をしめして晴るる時雨かな』これが私の生まれてはじめての句でございます。気仙沼のほととぎす派の、川口仙秋様の句会でございました。美髯のおじ様ばかりでございました。

書を志す様になり自分の句を書きたく、雪解に入門、皆吉爽雨先生、大竹きみ江先生の御指導を戴き、現在に至って居ります。名句、自詠句を書いたします時、心温まる気持、句の御縁を戴いた事を有難く思って居ります。合掌

寸感
宮沢　映子（吹田）

自然の移ろいの呼吸にたじろぎがちの私も、ときには造化の神のふところを垣間見たいとおもうことがある。その時、その神の心音を聴きとめることが出来たらどんなにか倖せだろうとおもう。

すべてを捨てたはずのあの芭蕉にして終焉は木枯すさぶ枯野に夢はかけめぐるのである。

おもえば遥かな道のりではあるけれど、霞むかなたへ歩きつづけるより他はない。

春のこころ
中川　宏（箕面）

寒さに耐えて、地に低く這うように咲いていた畑菜が、やわらかく味も濃やかになってくると、毎年きまったようにあえものをしたくなり胡麻だの芥子だのと心がはずみます。自然の中に生えているいのちを思います。

日本の様々な時代が様々な思想をはぐくんで、様々な矛盾や葛藤を生みました。

日本の自然の中で生まれた短い短い詩、俳句もまたそれゆえに、より豊かに、より美しくいのちを溢れさせているのかも知れません。

伝承への努力
吉永　淡草（宇治）

数多い俳句人口、高齢化現象、これは平均寿命の延長、出産率の低下等による人口年齢構成の推移、豊かさによる生活環境の変化等によってもたらされた必然的な現象である。

若い人の層が少ないということは止むを得ないこととしても、今最も大切なことは、指導者の一人一人が熱意を持って、伝承してゆく次代をつくるために、あらゆる努力を傾注しなければならない時に至っていると思う。

伝統俳句の庶民性は亡びるものでないと私は信じている。伝承への努力こそ怠ってはならない。

国鉄の様な訳には
竹本　素十八（堺）

協会に対する意見を「ひとこと」となると先づ会費の高い事をいいたい。勿論高い安いの価値観は相対的な問題でこれを利用出来る人にとっては適正であるかも知れないが東京以外の在住者は殆ど高いと感じて居るのではなかろうか。

一度会員の地方別・年齢別を割出して、その構成人員の比率から現在の若い人達がこの経費負担をどの様に考えて居るか検討して、協会の将来を考えて見たらどうだろう。

国鉄の様に値上げをして国鉄ばなれ現象が起きたら、税金におんぶしてという訳に行かないのだから。

若沙忌
山本いさ夫（奈良）

一門に若沙忌のあり梅咲けば

本年の二月二十八日は昭和十八年発刊から「いそな」誌を主宰された中村若沙の四年目の忌日である。

祥月命日の日曜日とあって亡き師を偲ぶ百余人が集まり、宝塚聖天墓地の師の墓に詣で、新主宰高木石子を中心に寺務所会館にて忌を修しての追悼句会を催した。

事すべて短信に足り梅二月　若沙

二月生まれでもあった亡き師は梅二月という言葉を殊に好まれ多くの佳句を残している。

俳句の効用
堀口　俊一（尼崎）

俳句は私にとって二つの効用がある。

一つは趣味として、精神衛生面での効用である。すなわち、本業（医学の研究・教育）によるストレスを解消し、さらに本業での創意ある発展を惹き起こす動因となることである。

いま一つは、私の本業にかなり直接的に関連した面での効用である。それは、詠もうとする対象を十七音へ凝縮させる作句の訓練が、とかく冗長、晦渋となりやすい研究論文を、簡潔、明瞭たらしめるのに役立っていることである。

（七面へつづく）

塩尻峠の句碑
小口　白湖（岡谷）

国道20号線、岡谷市塩尻峠のバス停で下車、塩嶺公園に入る。

○みづうみに突出て豊の稲田哉　虚子

○秋雨の諏訪湖見下ろす最合傘　立子

の父子句碑が並んで立っている。さらに奥へ登ると小鳥の森に。

○慈悲心鳥翔ゆく霧に田を植うる

昨年五月に除幕された秋櫻子句碑である。公園内を更に北進すると中山道の旧道に出る。峠路の旧本陣の前庭に青邨句碑に遇う。

○野沢菜の紫ならんとして冬に

周遊一時間。来遊せられたい。

自句自解
吉川　堯甫（相模原）

「鞍替の妓降りたる深雪駅」かまくらの吟行を思い立ち上野発「つばさ」に乗り込むと、車内には二人の年増が掛けていた。それは私の斜め前方なので派手な身装や仕草がよく目につく。網棚には風呂敷包などゴタゴタ載っており通路には大きな旅行鞄が置き放し。

郡山でも福島でも降りる気配はなく睡りてくっている。列車は赤谷板谷トンネルに向って吹雪の中を驀進する。日の昏れた横手駅に着くと出迎の若衆がドヤドヤ乗込んで来て荷物と一緒に降りて行った。

翌晩地元の知人数名を料亭Hに招き小宴を催した。一応盃が回った頃ママさんが挨拶に来ましたと言う女中頭の後の女将と顔を合わせた途端意外の再会に双方共思わず声を出して仕舞った。

それを誰かが聞き逃さず「何だ知合いだったのか」と言うのを引取って女将が上海香港旅行の帰途昨日上野から同車だったこと、このかまくらの時期に若し宿が決っていないのなら来て貰う様いえばよかったなどLの女将と話し会ったことを一部始終縷々説明した。

私は鞍替と決めつけた非礼を詫びながら箸紙に右の一句を認めて一座にまわした。

会費ご納入のお願い

この度、五十七年度俳人協会費につきまして、会員皆様宛に、振替払込用紙を添えて納入のお願いを申し上げております。

なるべくお早めに、お納め下さいますようにお願い致します。

経理部

昭和五十六年十二月刊行（続き）

清川とみ子	句集	白木槿	風発行所	一五〇〇円
鈴木すなを	句集	朱夏	林苑発行所	二〇〇〇円
瀧　春一	句集	花石榴	風神社	二三〇〇円
中野ただし	句集	砂條	牧羊社	二三〇〇円
林　翔	句集	石笛	牧羊社	二二〇〇円
水野そよ子	句集	火桶	東海俳句懇話会	ナシ
後藤比奈夫	句集	東遊園地	京美術東	一〇〇〇円
笠原　湖舟	句集	笠原湖舟句集	百合丘産業	非売品
堀越篤林子	句集	蒲ざくら	秋発行所	二五〇〇円
朔多　恭	句集	菜の花いろの風景木下夕爾の詩と俳句	牧羊社	一六〇〇円

昭和五十七年一月刊行

北村　仁子	句集	木綿	永田書房	二三〇〇円
児玉　南草	自註現代俳句シリーズⅣ～23		俳人協会	一〇〇〇円
関野　星夜	句集	血族	一日書房	二三〇〇円
下村　非文	句集	桂花	山茶花発行所	二〇〇〇円
佐川　広治	現代俳句選書㉜	光体	東京美術	九〇〇円
矢野　藍女	矢野藍女遺句集		白鳳社	非売品
笠原てい子	文集	三鈷の松	東京美術	二五〇〇円
坪和久仁子	句集	弓稽古	手帖舎	一三〇〇円
峰岸　新樹	句集	尾瀬	東京美術	二三〇〇円
宮崎　氷滴	句集	歓喜鶏	海郷俳句会	二〇〇〇円
竹本　青苑	句集	黄楊の花	さき書房	二三〇〇円
根岸　善雄	句集	霜晨	東京美術	二五〇〇円
椎橋　清翠	句集	和名抄	角川書店	二三〇〇円
高木　晴子	句集	みほとり	東京美術	一〇〇〇円
牧野　吐龍	句集	一聲	著者刊	二〇〇〇円

昭和五十七年二月刊行

皆吉　爽雨	句集	聲遠	求龍堂	三二〇〇円
村松　正明	村松正明句集		八幡船社	一三〇〇円
金坂　豊	句集	笹鳴	著者刊	一七〇〇円
河本　和	現代俳句選書㉞	簾陰	東京美術	九〇〇円
伊室　静子	句集	扇惜し	伊室隆弘刊	非売品
黒木　爽岳	句集	三千の鶴	牧羊社	二四〇〇円
岸田　潮二	句集	梧桐	手帖舎	二〇〇〇円
稲垣　郭公	句集	鳥柱	アトリエ鴨雪舎	ナシ
太田　嗟	句集	厚朴	恵那発行所	二〇〇〇円
高崎　武義	句集	明日葉	竹頭社	二五〇〇円
高橋伸張子	句集	雪椿	竹頭社	二三〇〇円

昭和五十七年三月刊行

千田　一路	句集	能登荒磯	風神社	二二〇〇円
内田　滋子	句集	福笹	牧羊社	二三〇〇円

【昭和五十五年度版以降の俳人協会員名簿により、逝去者をも含めたものです】
【俳句文学館・受付蔵書台帳の56年12月9日～57年3月15日付整理済みの中から個人著書のものに限りました。従って、共著・合同・編のものは、削除させていただきました】

平畑静塔顧問『風土』を語る

昨秋、初めて宇都宮の地を訪問。六月に第五句集「漁歌」の上梓を終え、そして、オーストリア・スイス・フランスのご旅行から帰ってまだひと月余りという時に、お伺いしたお話をお届けします。

宇都宮病院応接間で「風土」について語る静塔顧問

今度は、ウイーンで、斎藤茂吉が昔、下宿していた所がまだ残っていて、五階建ての古い建物の一室なんですが、それを実地に当たって、「ああ、ここだったか」ということで、誓子先生ご覧になっていましたけれどね。私は、その近くのアパート――フロイトのウイーン最後におった所をバスの中からですが見て来ました。ロンドンへ亡命するまでウイーンに頑張っていたんですが、ちょうど茂吉の下宿先の近くでしたから。それから、当時、茂吉もユングフラウヨッホへ登っているので、われわれも登って来ました。ま、誓子旅行団は、実地見聞ですね。有名な、自分達の知っている人達の跡を見てくるというのが主たる目的ですから、十七文字はあまり縁がないです。誓子先生にもあまり外国の俳句はないでしょ。私もアラスカと北欧のフィンランドで作ったくらいです。

滋子　「壷国」の最後に、アラスカ紀と題して、四十二句載せていらっしゃいますね。〝白檀の扇の風に飛ぶ羽田〟に始まり、〝千羽鶴青蓬莱の夢を見し〟で終わっています。

編集部　〝氷河とのこだま遊びのくりかえし〟とか〝そのひらに氷河のかけら水となる〟なんて、ロマンチックな感じがしますね。

ルツェルン

滋子　いつもご旅行は奥様とご一緒でございますね。

静塔　ええ、われわれの団体は、今回も女性が二十何人、男は六人。専ら、昼間の常識的なコースばかりですよ。いつか、スペインでフラメンコのダンスを見に行きましたが、あの時は、ま、誓子先生も来られました。あとは、夜の観光はナシ！ご老体ばかりですし、昼間の観光で疲れておりますしね。女性陣は、特に、おみやげを買うこと専門ですよ。あまりお金を使わないのは、誓子先生と私くらいでしょ。コーヒーとかビールを飲むくらいですから。

滋子　スイスの町はいかがでした？

静塔　ルツェルンという古い町に、瀕死のライオンの像がありましたが、これが一番印象に残っています。ライオンが死にかけているんですが、足元には盾があって、足で抱えているんです。その姿にはホロッとしました。フランス革命の時のルツェルンの農民が、王朝側について助けに行ったんですが、最後には、殉死したというその象徴の象彫なんでしょう。この町は、スイスの古い町なんですが、いい町でした。宿をとりましたがここが一番落ちついていて、湖の傍のいい所でした。

編集部　お料理は、いかがでしたか？

静塔　私は、どちらかというと、和食より洋食の方が好きなんです。唯、機内食は飽きましたね。次から次へと、どうぞ、どうぞと持って来て……。あれは少し、サービス過剰じゃないかな。ま、それも、運賃に入っとるんでしょうが――。

宇都宮と言葉

編集部　この辺で宇都宮のお話も……。

滋子　そうですね。そういえば、先生は関西からこちらへお伺いになられて、何か、風土の違いみたいな事お感じになりますか。

静塔　まず、言葉が違うこと――。関西で何でもない言葉が、こちらでは、妙に聞こえ、時には無礼に聞こえ、また、こちらで何でもない言葉が、関西から来たばかりの時は、非常にショッキングに聞こえた事がありましたね。例えば私が拝見する病人さんは、頭の方の病人さんですから、少しザックバランな砕けた言葉も使います。何の気なしに、つい、関西弁で「アホカイナ」と言ったら、若い患者さんでしたが真っ赤になって怒りまして――ま、この言葉は、関西では冗談半分によく使うし、ユーモラスな感じで言ったつもりなんですが、「侮辱された」「癇に触った」といって。だから、問答を打ち切りにしましたが。

滋子　こちらでは、冗談でいう「ばかみたい」ということでしょうか。

静塔　「ばかこけ」ということかな。それに、関西弁のその抑揚自体も良くないと言って怒り出した。ま、これにはぎょっとしましたなあ。

あと、こちらではね、目上の人に物を差し上げる時にも、「やる」って言うんですね。「買ってやる」とか「買ってやっかなあ」と言うんですなあ。「やる」というのは、われわれ日本の通念だと目上の者が目下の者に物をやるということでしょ。ところが、私の俳句のお弟子さんが「買ってやっからなあ」と言うんです。初めの頃は、おかしいなあと思いましたね。

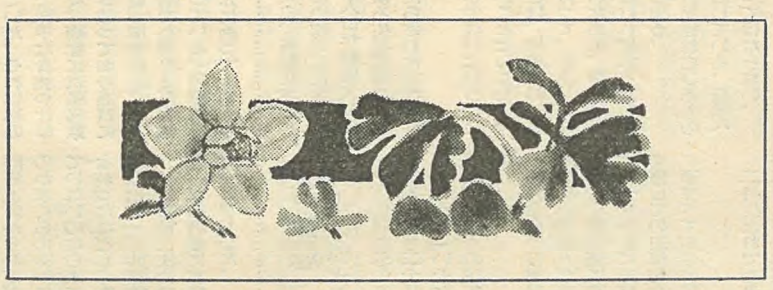
また、ここの病院の経営者の人ですが、関西の大阪大学にいた時に、「もうかりまっか」と言って、金の話ばかりしていやらしい、とても私の肌に合わない、と言ってましたが。でもこれは「こんにちは」という一種の挨拶ですよ。別に商売がうまくいってるからという金銭的な事じゃないんです。「どぎつくて耐えられない、今でも頭にこびりついて離れない」というんです。これだけで関西の印象を悪くされても困りますね。もう何百年も続いているんですし、関西出身の経済界の大物だっておそらく使うてますよ。

滋子　「鳥銜へ去りぬ花野のわが言葉」とか「まだ他国者綿虫にみちびかれ」という先生の俳句がございました。

滋子　日吉館へは、当時はよく行かれ、日参されるほどとか。

静塔　ま、月参ぐらいだけど、でも偉いばあさんもいるもんです。しゃんとしてますしね。

滋子・編集部　先生も負けてはいられませんね。ますますの御活躍を期待しております。今日は、本当にありがとうございました。



誓子旅行団

編集部　九月に、山口誓子先生と御一緒されたヨーロッパのお話をお伺いしたいのですが……。

静塔　今回の旅行は、主としてオーストリアのウイーンとスイスのモンブランへ登るのが目的でした。帰りに、パリへは、二泊しましたが。

編集部　毎年行かれるんですか？

静塔　いや、私はそんなに毎年出かけられませんよ。今まで誓子旅行団へお伴して参ったのは、五回です。一昨年のスペイン。その前が、北欧。その前はメキシコ。一番最初は、アラスカの氷河。

編集部　そうですか。俳人も海外旅行が多くなりましたね。

静塔　そうですね。でも、誓子旅行団は、俳句関係者の集りになっていますが、私自身は作りません。誓子先生自身も作らないようですし、俳句の話も出ませんし、俳句を作らん人もおります。それに、誓子先生はいつも、いろいろ考証して、いらっしゃるんです。

海外旅行

静塔　ご老体は別として、日本の中年青年の四分へ一ぐらいは、海外旅行に行ってると私は推定してるんです。もしかすると、半分位行ってるかもしれませんよ。特に学生なんか、夏休みになるとリュック担いで一人旅でしょ。たいしたもんです。日本人の世界観もこれからどんどん変わってくるでしょうね。まず、われわれと同じ――変わりないわ、という事が分かるでしょうし、古い文化に触れて、また、日本の文化を見直す事になって、若い人が行くのはいい事じゃないですか。

行って良かったという人の方が多いでしょうな。向うで、泥棒に会ったり、病気をしてひどいめにあった人は別でしょうが……。

編集部　では、平畑先生も、また機会があったら行かれますか？

静塔顧問から話を聞く滋子さん

静塔　えええ、行きますよ。この間も、誓子先生に「今度はどこへ行くんですか？　もう行く所ないんじゃないですか」とお聞きしたら「いやいやまだいっぱいあります」「どこですか」「そうですね。英国のシェークスピアのあとを回るとか、ドイツのライン下りをしたり、古城巡りが残ってます」なんておっしゃっておられたから、まだまだ行かれるおつもりじゃないですか？

編集部　お話を伺ってますと、ポイントを搾って、回っていらっしゃるようですね。

静塔　ええ、そうですね。楽に、ゆっくり行こうという、ま、高年向きですか。それでも、前は、買い物の時間が少なかったんですが、注文がでたんでしょ。それから多くなりました。

奈良日吉館

編集部　最後に何か最近のトピックはありませんか。

静塔　奈良へこの間行きました時、何十年振りかで日吉館へ行ったんです。暑い時で、玄関を入ると甚兵衛を着たおばあさんが後向きで何かしている――「こんにちは」というと、そのおばあさん、ま、おかみさんですが、振り向くと同時に「あら、静塔先生」と名前を覚えていてくれましてね。

滋子　まあ、お懐しかったんでしょうね。

静塔　八十は越えてるでしょう。そのご老婆さんが、あれだけ多くのお客さん相手なのに、二十五、六年も音沙汰無しの私を一目見て名を呼んでくれて。

静塔　まず、言葉が違うこと――。関西で何でもない言葉が、こちらでは、妙に聞こえ、時には無礼に聞こえ、また、こちらで何でもない言葉が、関西から来たばかりの時は、非常にショッキングに聞こえた事がありましたね。例えば私が拝見する病人さんは、頭の方の病人さんですから、少しザックバランな砕けた言葉も使います。何の気なしに、つい、関西弁で「アホカイナ」と言ったら、若い患者さんでしたが真っ赤になって怒りまして――ま、この言葉は、関西では冗談半分によく使うし、ユーモラスな感じで言ったつもりなんですが、「侮辱された」「癇に触った」といって。だから、問答を打ち切りにしましたが。

滋子　こちらでは、冗談でいう「ばかみたい」ということでしょうか。

静塔　「ばかこけ」ということかな。それに、関西弁のその抑揚自体も良くないと言って怒り出した。ま、これにはぎょっとしましたなあ。

あと、こちらではね、目上の人に物を差し上げる時にも、「やる」って言うんですね。「買ってやる」とか「買ってやっかなあ」と言うんですなあ。「やる」というのは、われわれ日本の通念だと目上の者が目下の者に物をやるということでしょ。ところが、私の俳句のお弟子さんが「買ってやっからなあ」と言うんです。初めの頃は、おかしいなあと思いましたね。

また、ここの病院の経営者の人ですが、関西の大阪大学にいた時に、「もうかりまっか」と言って、金の話ばかりしていやらしい、とても私の肌に合わない、と言ってましたが。でもこれは「こんにちは」という一種の挨拶ですよ。別に商売がうまくいってるからという金銭的な事じゃないんです。「どぎつくて耐えられない、今でも頭にこびりついて離れない」というんです。これだけで関西の印象を悪くされても困りますね。もう何百年も続いているんですし、関西出身の経済界の大物だっておそらく使うてますよ。

滋子　「鳥銜へ去りぬ花野のわが言葉」とか「まだ他国者綿虫にみちびかれ」という先生の俳句がございました。

滋子　日吉館へは、当時はよく行かれ、日参されるほどとか。

静塔　ま、月参ぐらいだけど、でも偉いばあさんもいるもんです。しゃんとしてますしね。

滋子・編集部　先生も負けてはいられませんね。ますますの御活躍を期待しております。今日は、本当にありがとうございました。

とき　昭和56年10月21日（水）
ところ　宇都宮病院
聞きて　内田滋子（天狼・狩）
　　吉野洋子（編集部）

俳人協会創立二十周年記念
第21回　全国俳句大会御案内

俳人協会主催（朝日新聞社後援）の全国俳句大会は俳壇の主な結社が合同して、しかも全国的な規模で行なう俳句大会です。奮ってご応募願います。

◇募　集＝三句一組（雑詠・未発表のもの。二百字詰原稿用紙使用）何組にても可。
◇会　費＝一組につき千円（現金書留又は小為替）
◇締　切＝六月十日（当日消印有効）
◇送付先＝東京都新宿区百人町三―二八―一〇（〒160）
　俳人協会「全国俳句大会」係あて。
◇選　者＝阿波野青畝・山口誓子・中村汀女・大野林火・安住　敦・石塚友二・有働亨・遠藤梧逸・加倉井秋を・岸風三楼・岸田稚魚・木村蕪城・清崎敏郎・草間時彦・小林康治・香西照雄・沢木欣一・進藤一考・高木晴子・鷹羽狩行・千代田葛彦・野沢節子・能村登四郎・橋本鶏二・原　裕・平畑静塔・福田甲子雄・細見綾子・堀口星眠・松崎鉄之介・皆吉爽雨・村山古郷
　（順不同・一部交渉中）
◇発　表＝十月十六日（土）午後一時より
　国立教育会館虎ノ門ホール（入場無料）
　東京都千代田区霞が関三―二―三
　地下鉄　銀座線　虎ノ門下車
◇賞　＝入賞者には文部大臣奨励賞・俳人協会全国俳句大会賞・朝日新聞社賞・各選者の特選には賞品。
◇講　演＝暉峻康隆・大野林火
☆募集句は選者の一部で予選を行ない、大会終了後一ヵ月以内に応募者全員に入選作品をお送りします。会費の受領証は発行いたしません。
☆なお、大会当日参会者より一句を募集、出席選者数名による選を行ない、特選句には賞を呈します。（投句〆切一時半・会費無料）

昭和五十七年四月

主催　社団法人　俳人協会
〒160　東京都新宿区百人町三―二八―一〇　俳句文学館内
後援　朝日新聞社

俳句文学館図書室利用案内

開館時間　午後一時～午後四時
　　複写申し込みは三時半までに。
休館日　水曜日・木曜日
入室料　百円
複写料　一枚五〇円
二階の閲覧室にて、受付致しております。
また、俳書目録は、品切れ。俳書追補目録・俳誌目録は各一部五百円、送料二百円で頒布しています。

俳句文学館図書室

深大寺に草田男句碑

傘寿記念に門弟が初建立

東京都神代植物公園と隣接する調布市の深大寺境内に顧問中村草田男氏の句碑が建立され、二月二十日午後二時半より、門弟約百名が参列して除幕式がおこなわれた。句は教科書によく採られている代表作「萬緑の中や吾子の歯生え初むる」。石材は本小松石。主宰の傘寿記念として「萬緑」の同人・会員その他の有志により建立された。

草田男句碑としては、母校である港区・青南小学校校庭にあるは、二月七日(日)の午後一時より山形県民会館地下講堂において開催された。今年も例年のように大雪の日となったが、八十余名の会員の出席により満員の盛況を呈した。

開会に先立ち、一月八日に死去された大谷桃村幹事長に黙祷を捧げ、次いで俳句大会に移った。秋沢会長より新年の挨拶が述べられ「今年は大谷幹事長が亡くなられ、お目出度うを申しあげられないのが残念だ。しかし会員数が三百八十名を超えたことは、県俳人協会に期待することが大きいので、全員が一致協力して会の発展に尽くそう」と呼びかけられた。

続いて投句数五百三十四句の中から地元七人の選者により、それぞれ特選三句、秀逸五句、佳作十句を選び発表され、賞状賞品の授与が行なわれた。会に引続き懇親会が催され、新年らしい和やかな雰囲気のなかの懇談となった。

亡くなられた大谷桃村幹事長は山形市出身、阿波野青畝氏に師事。「かつらぎ」同人で句集に「花うぐひ」「雪映え」の二冊がある。享年六十八才。

(長谷川耿子報)

深大寺に建てられた「萬緑…」の句碑

「降る雪や明治は遠くなりにけり」に次いで第三番目のものだが、門弟建立の句碑としては最初のものである。最初のものがこんなに遅れたのは、存命中の句碑建立を草田男氏が永い間拒否してきたためである。

深大寺の庫裡の庭には草田男の師である虚子の胸像もあり、また、この寺での毎年の俳句大会の選者をしたこともあり、氏とは縁の深い寺である。

新季語になった「萬緑」は結社名ともなっており、また、隣接の植物公園の萬緑にもかかわってもいるようで、門弟建立の第一句碑の作品としては最適であろう。

(香西照雄報)

山形で新年俳句大会

山形県俳人協会(秋沢猛会長)主催の第四回山形県新年俳句大会

四月集

春山へ濡れて通へるけものみち
石棺の蓋あいてゐる朧かな
ひとひらの羽根毛うかべて春の池

春山　黛　執(神奈川)

天竜の雉子雑灼を旅はじめ
山眠る人拒む石落しつつ
鯉喰つて正月の山歩るきけり

山眠る　原田　桃里(碧南)

笹鳴や叩きて撫して窯繕ふ
鹿の出し騒ぎを昼に村朧
横顔の音無き若布切りゐたり

村朧　小倉　行子(洲本)

随想

虚子庵の思い出

土山　紫牛

初めて虚子庵をお訪ねしたのは昭和25年3月10日、よく晴れて暖い日であった。

昭和20年10月、幼時から40年余も住みなじんだ朝鮮から引き揚げて来た後、縁あって大蔵省管下の大阪(のち近畿)財務局に就職していた私が公用出張で上京し、無事に用務を果たした後の僅かな時間に急に思い立っての鎌倉行であった。

横須賀線の鎌倉駅に下りたのは昼過ぎ、原の台の虚子庵はたしか六地蔵の近くと聞いていたのを思い出しながら、あちこちで尋ねてやっと教えられた虚子庵らしい木戸の前に立った。古い板塀のつづく木戸の柱の小さな木札に消えかかった字で「高濱」とわずかに読めて安心した。

やがて座敷に通されて待つ間もなく、着物姿の虚子先生が静かに入って来られ、「今雑詠の選をしているので十五分位なら――」と座につかれた。

私は帰国以来の近況や、今年喜寿を迎えられた先生へのお祝いとともに、その前の年図らずもホトトギス同人にご推挙を頂いたお礼言も忘れずに申しあげた。先生は「外地から引揚げて来られたのに、早くよい仕事に就かれてよかったですね」と喜んで下さった。

お約束の時間になった頃、玄関に来客があり、通じられた名刺により徳富蘇峰先生の秘書の林某氏とわかった。林氏は座につくと、「先生、今年は喜寿をお迎えになり、おめでとうございます。今日はそのお祝いにと、蘇峰先生のお使いで参上しました」と言いながら、持参した風呂敷包みから細長い桐の箱を卓上におき、「先生どうぞご覧下さい」といった。

「蘇峰先生には今年米寿と承りましたが、おめでとうございます。今日はわざわざお越し頂き恐れ入ります」と虚子先生はその箱から一幅の軸をとり出して「拝見いたします」とそれを披かれた。林氏は「先生、この軸の用紙は蘇峰先生が米寿に因んで、ご自分の銀髪を漉きこんで八十八枚だけ特別に作らせたうちの一枚です。その富士山の絵は横山大観先生のお筆で、そこに刷かれた紫の瑞雲は山葡萄の実で染めたそうです。そして添書の〝謹祝喜寿高濱虚子先生へ米寿蘇峰学人〟は勿論先生のお筆です」と説明した。

虚子先生は殊のほかご満悦の様子で「これはこれは何よりのものを頂戴しまして、誠に有りがとうございます。どうぞ蘇峰先生にくれぐれもよろしくお伝え下さい」と、なおしみじみと眺め入っておられた。

そのうちに林氏が辞し、私もお暇した。十五分の予定が意外の長居となったが、思わぬ眼福まで授かった初めての虚子庵は、私の生涯の深い思い出となった。

あれからもう三十二年、この4月8日には早くも二十四回目の虚子忌が来る。なお私事ながらこの9月には、私の喜寿の誕生日が来る。

(五面より続く)

夜顔

倉重　鈴夢(防府)

夕顔には、うり科のものとひるがお科のものと二種類があり、前者は平安朝の頃、後者は明治になってから我国に移入された。

俳句作品では両者が混乱して、明治以後の作品にはいづれを詠んだものか分らぬものが生じている。植物学の方では田中芳男氏によって、早くからひるがお科のものに夜顔という名前がつけられて統一されている。

これにならって、一昨年刊行された「季寄せ一草木花」(朝日新聞社)と昨年出来た「カラー図説日本大歳記」(講談社)とが夜顔という新季題を設けて、この混乱を解消しようとしているのは誠に喜ばしいことである。

俳句も新カナ使いに踏み切るべき

岡部　巴峡(広島)

新カナ使いになってからもう三十六年たつ。当時小学校の一年だった者は現在四十二歳である。これ以後の人達はがくがうやてふてふが学校・蝶々の読みであることは習っていない。

今俳人の年齢が高くなっているが、その原因は若い層が居ないことである。つまり新カナ使いしか知らない者が俳句作家に少ないということだ。大言海も新しい姿で世に出直した。俳句界もこの際新カナ使いに踏み切っても早すぎはしないと思う。

碁仇のような

松尾　涛子(福岡)

ひそやかに職場の定年が迫りつつある。見回して退職後も交友を続けたい人は正直いっていない。

〝夏帽や職場の友は職場ぎり〟いみじくも、安住敦先生は斯く詠まれた。そこへゆくと俳句の連衆の何と有難いことか。碁仇ではないけれど憎さ三に懐しさ七といったところ。この三が私を奮い立たせてくれる。作句を怠らない限り連衆は私を見放さない。かくして俳句との交わりが一歩一歩ふかくなってゆくのだなと思う。

次の世代を継ぐものために

井尾　望東(福岡)

俳句人口の老齢化が進行している事は日本の人口動態よりして当然というほかはない。とは言え若い人が少ないことは問題である。

このために協会として、例えば「小中学校部」とか「青年部」といったものを設けて、次の世代に日本伝統であり独自の俳句文学を引き継いでゆく者を育てる本格的事業に取り組んでもらいたい。

長崎の十善寺

築城百々平(長崎)

長崎の唐人屋敷は十善寺とよばれる地域にあった。昔はここに長崎氏の祈祷寺があったが、慶長年間切支丹寺と変り、それも秀吉の禁制により毀されて薬園となり、更に唐人屋敷ができた。

現在唐館の遺構は櫛比した民家に埋まり、狭い坂や路地が迷路のように続いた、映画「望郷」のカスバにも似た地域で、猥雑だが生々した長崎の一面を示している。ピエル・ロチが一八八五年ひと夏を過したのもここで、日記にDiou-dien-diziと誌している。

お菊さん住みゐし坂の朧なる

創刊号物語〈52〉

京鹿子

田淵　万丈

「京鹿子」は京大三高俳句会を源流として発足したことはまぎれもない。

発刊当時の同人は六人であった。

岩田紫雲郎・田中王城・高浜赤柿・中西其十、それに日野草城と鈴鹿野風呂であった。

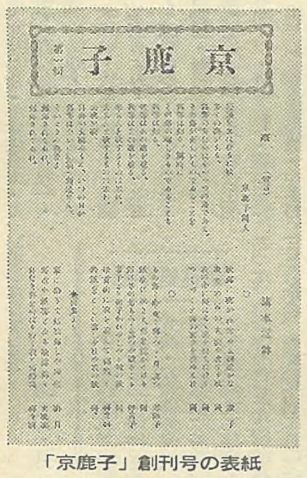
奥書によると大正九年十一月十九日に印刷して、大正九年十一月二十三日に発行となっている。定価は一部拾銭である。

編集兼発行人は京都市上京区吉田町第三高等学校内日野草城となっている。

大正七年九月に第三高等学校へ入学した日野草城は同じく学生であった五十嵐播水らとはかって「神陵俳句会」を大正八年七月に結成している。それが発展して大正九年三月に京大三高俳句会が創られた。

その年の四月に鹿児島の川内中学に勤務していた鈴鹿野風呂が京都の吉田町へ帰って来て武道専門学校に勤めるようになった。

京大三高の若き俊秀が未来かけ



「京鹿子」創刊号の表紙

野風呂は高等学校は七高であったが大学は京大であり俳句にあっても日野草城より一日の長があったので草城は野風呂に兄事した。

創刊号は第一輯として編集され、「京鹿子」なる名称も同人相寄っていろいろの名前をもちよったが草城の京鹿子草からの連想であっさり決ったと、その当時の思い出をいつか鈴鹿野風呂が書いていたのを読んだことがある。

表紙を入れてわずかに八ページの小冊子ではあるが草城の消息を見てもわかるように京大三高の若い者たちが、新しい熱に浮かされて創ったという感じをうける。

「我々の俳句(京大三高俳句会筆者註)の発表機関が欲しい欲しいとは、紫雲郎さんと顔を合はせるごとに口癖の様に言い合った言葉であった。宿願遂に叶って、御覧の通りの貧弱なもの乍ら我等のものと公言し得る王国を得たことを、私は心から嬉しく思ふ。」と手放しで得意がっている。

更にこの創刊号は日野草城が「我等の歩むのはその一つの路である。その路が正しいものであることを我等は知るのであることも我等は知る。彼等はあの路を登る。我等はこの路を登る。来らんと欲するものは来れ。去らんと欲するものは去れ。……

これが後に野風呂が引継ぎ今日七〇〇号迄胸を張って来た京鹿子の歩みの一歩である。

ほとんど一人で編集、発行まで行ったことは次の言葉がよくそれを証明している。

「何分、経験に乏しい私一箇の手に捏っちあげたものであるから、是で精一杯である。しかし希望や期待は未来に懸けてゐて戴きたい。今月は巻首の装飾句も少いが、本誌に対する同情の増えると共に益々俳壇の諸星を網羅して光彩を放つに至るであろう。」とその抱負を述べて意気盛んなものがある。

巻頭言にあたるものに、

――路――と題し、宣言がかかげてある。京鹿子同人とかかげてはあるがこれも日野草城の若さがよく出ているのでかかげて、京鹿子が六十有余年脈々と続いて来た原動力を見たい。

絶巓をきはむるには多くの路がある。我等の歩むのはその路である。その路が正しいものであることを我等は知る。同時にその路の嶮しきものであることも我等は知る。

彼等はあの路を登る。我等はこの路を登る。来らんと欲するものは来れ。去らんと欲するものは去れ。……

これが後に野風呂が引継ぎ今日七〇〇号迄胸を張って来た京鹿子の歩みの一歩である。

第四回　両丹俳句大会

日時　昭和五十七年四月二十五日(日)
午前十一時受付　十二時開会
場所　福知山市民会館(福知山市内記)
投句　席題二句、当季雑詠未発表もの。
当日受付と同時に投句。
投句料　五〇〇円(当日受付)
講師　森田　峠俳人協会理事、「かつらぎ」同人。選評・講話があります。
選賞者　当日出席者全員の互選
福知山市長賞、俳人協会賞ほか。
連絡先　〒六二二五　舞鶴市二条大門北入二条　左近宛　TEL(〇七七三)六二―八八三
主催　俳人協会両丹連絡会
協賛　社団法人　俳人協会
後援　福知山市他

俳人協会創立二十周年記念出版
俳人協会賞作品集
A5版三八〇頁　定価三五〇〇円(送料三〇〇円)
二月上旬発売(予約申込受付中)

昭和三十六年第一回受賞石川桂郎「佐渡行・他」以後、昭和五十五年受賞細川加賀「生身魂」に至る二十年間の受賞作二十六篇を受賞当時のまま収めた作品集。各年代の俳風と業績を如実に伝え、俳句文芸の精華と著者の栄光をここに結集し併せて協会の歩いて来た二十年間の発展を象徴するにふさわしい作品集である。原文に一字一句の変更も加えず、巻末に各年代の選考概況と、著者略歴と本集解題を加えた。

収録内容　第一回・石川桂郎『佐渡行・他』　第二回・西東三鬼『変身』　第三回・小林康治『玄霜』　第四回・千代田葛彦『旅人木』　第五回・鷹羽狩行『誕生』　第六回・磯貝碧蹄館『握手』　稲垣きくの『冬濤』　第七回・菖蒲あや『路地』　及川貞『夕焼』　第八回・上田五千石『田園』　第九回・相馬遷子『雪嶺』　第十回・石田あき子『見舞箋』　林翔『和紙』　第十一回・岡本眸『朝』　第十二回・岸田稚魚『筍流し』　第十三回・成瀬桜桃子『風色』　第十四回・村越化石『山国抄』　第十五回・赤松蕙子『白亳』　中山純子『沙羅』　山田みづえ『木語』　第十六回・鈴木真砂女『夕螢』　堀口星眠『営巣期』　第十七回・下村ひろし『西陲集』　第十八回・殿村菟絲子『晩緑』　第十九回・古舘曹人『砂の音』　第二十回・細川加賀『生身魂』

発行所
〒一六〇　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
社団法人　俳人協会
郵便振替口座　東京六―二七三

俳句カレンダー鑑賞

〈四月〉

昭和十九年上梓の第三句集「雲板」に収録。昭和十七年先生四十一歳の時の作である。先生は花鳥諷詠、自然凝視の写生俳句を作句上の信条とし、門下にも写生の大道を歩むことを教えとしてこられただけに写生には実に厳しい態度を持っておられる。写生道は大ぜいが脇見をしながら安穏にゆける道ではない。真の写生道はまれにしか登頂の出来ない峻路だと仰言る。その多くの著書のどこを開いてある。万朶の花の美事さに息をのむほどの感嘆があってとその「立ちつくす」ではなかろうか。又「花のひとひらちりしのみ」までの時間の経過は空白である。千金の重みを持つ空白である。先生はも写生俳句への道を実に綿々と説かれたものばかりである。

この句表現は平明で「立ちつくす」と単刀直入に始まっている。つまり導入部が省かれているので目にふれ心にふれたものに対して足を運んでじかに向きあうことによって詩因が生まれ表現欲をおぼえると言われる。同時作に咲きみちし花のま中のふとあふつ枝ゆれのうつり消えつつ花しづかなどの句を見ることが出来る。

先生は旅を愛し心を常に素直に稚く驚きやすく保持することを喝望し努力されている事はお年を召された今も決して変わらず、本年二月傘寿を記念して上梓された第十句集「声遠」のどの句も瑞々しく高潔で門下の先導を務めておられる。その主宰誌「雪解」も三十五年を迎え先生の御健康と共に力強い歩みを重ねている。

（岩鼻十三女）

立ちつくす花のひとひら
ちりしのみ
皆吉　爽雨

☆　☆

臨時休館のお知らせ

四月二十九日（木）の祝日は、定例休館。翌三十日（金）を臨時休館と致します。五月三日（月）・五日（水）の祝日は平常通り開館します。

俳句文学館・俳人協会

青森支部設立準備へ

8月発足メドに4月18日発起人会

俳人協会青森県支部設立について尽力中だった村上しゅら氏は三月十六日、案内役の小林康治氏と同道、東京・新宿の俳句文学館を訪問、草間理事長と話し合った。その要点は次の通りである。

県内有力者との話し合いは終わった。皆、支部設立に賛成してくれたので近く発起人会を開催して詳しい打ち合わせをしたい。

支部設立は八月頃、会員の集いとして行ないたい。

現在の青森県在住の会員は約三十名で、分布も片寄っているので当然会員になるべき人に入会してもらうよう努力したい。

以上の申し入れに対し、理事長から感謝の意を表し、四月十八日に青森市で発起人会を開くこととした。

村上しゅら氏は俳人協会評議員で、北鈴、鶴、林同人、第五回角川賞受賞者である。

村上しゅら氏談

「五十三年に八戸に見えた草間さんから支部設立のお話があり、やっとまとまりました。九月からは文化祭などがあるので、八月ごろに設立の集まりを開きたいと考えています。」

麓人画帖

〈6〉

無駄骨

村上　麓人

乙訓の四方の薮なり畑打　夜半

その頃、時々懐に写生帳を入れて、気の向くまま手近なところへ行って見るのが愉しみであった。昭和のはじめの頃で京都駅から汽車に乗って行った。多分すばらしい風景が描けるものと浮々していた。

「やまざき」で下車するともうそこが問題の「おとくに郡」になる。山が東西にあり北の方も山でそこに薮が取巻いていた。八幡の薮知らずといって八幡では薮に入ると出られない恐ろしい処だと祖母から聞かされていた。

乙訓では薮が深かったが眺めている分には迷い子にもならなかった。ただ、山々がありその手前にある薮がどうしても描き難かった。

そこであっさりと諦めて帰ることに決めて足早に駅へ歩いた途端、つんのめって転んでしまった。嫌という程、地面に顔をぶつけた。起き上った時、誰も見ている人がいなかったので、安心したが、それでも自分自身の不様さが情けなかった。

乙訓は静かな処である。そして如何にも田舎らしい。私は畑打こそ見なかったが、この「乙訓」の土を踏んだ事で満足した。

（原文旧カナ使い）

鳴門国立公園に橋本夢道の句碑

五十六年十二月五日、橋本夢道の句碑が建立された。橋本夢道の母郷である、景勝の地、徳島県鳴門国立公園千畳敷の丘陵で、句は「母の渦子の渦鳴門故郷の渦」。

図書寄贈者

昭和56年11月15日～昭和57年3月15日登録済図書　敬称略

鳥居美智子・北光星・三品靈中子・宮下翠舟・石原八束・柴の会・内藤貞子・橋本佳代女・横山美代子・四倉喜美子・渡辺ノブ・沢木欣一・田崎賜恵・高橋道人・松涛社・講談社・相葉有流・層雲社・富山県俳句連盟・鶴丸白路・東京大神宮・山一俳句会・吉田速水　小林まさえ・東京美術・笠置トミ・栗田やすし・安藤清峰・後藤薫風・内山芳子・高橋友治・辻恵美子・石川展子・梅田東山・村山古郷・津根元潮・草茎社・藤井亘・松尾早次・弥富町中央公民館・大川治一郎・中島双風・兵庫県西播俳人協会・靖国神社・柿畑文生　墨俣町公民館俳句教室・関西俳誌連盟・河出書房新社・主婦の友社・響焔俳句郡山句会・土井節子・福原十王・内田まきを・岡本麻子・小倉玲羊子・小西楊々子・佐藤春子・青玄東京支社・徳永山冬子・みちのく発行所・中山梟月・並木冬青・逸見茶風・中原海豹　小樽俳句協会・雲海発行所・稲妻発行所・萬葉堂出版・四季出版・東虹俳句会・兵庫県俳句協会・佐久間庭鳶・結城俳句会・福室秀山人・すばる俳句会・京都新聞社・新谷ひろし・赤井言鳥・高木拓川・北見弟花・毎日新聞社・俳文学会・身障者俳句サークル　軸俳句会・数馬あさじ・千代田葛彦・江口千樹・吉田和子・千葉艸坪子・野中陸三・羽田富士男・松籟俳句会・平井照敏・藤田三郎・南北城・村上杏史・八木原祐計・山田英二・山本美枝・山口素義・新井浄子・石塚真樹・加賀谷灰人・加藤万古刀・河口信一郎　川瀬一雄・北さとり・北村仁子・佐宗欣二・柴崎芙美子・田中十九三・津田清子・山口素人閑・成瀬林成・野村浜生・平木道幸・三木聆古・藤松遊子・高橋春子・三浦美津子・俳人協会・辺田貞夫・荒谷としを・泉紫像・沖山智恵子・迫光江・住吉青秋・清川とみ子　関野星夜・鈴木すなを・渡辺四郎・龍春一・多田薙石・多田睦子・四十九院科峰・中野ただし・林翔・深谷雄大・岡本庚子・水野そよ子・石昌子・久保リキ・後藤比奈夫・左右木右城・下村非文・本間たかし句集刊行会・森田公司・佐川広治・岩手県俳人協会　長野県俳人協会・井上富月・大竹芳・小川ハル・小林佐多夫・笹川菊子・高橋金之助・鶴村松一・現代俳句協会・三村風彦・西村忠一・木戸緑・笠原てい子・笠原湖舟・小出きよみ・高中静美・永野照子・成田ちかし・併和久仁子・皆吉爽雨・峰岸新樹・宮崎氷滴　依田明倫・奥田智久・村松正明・萩原アツ・野地堯水・堀越鴛林子・笹子会・青潮俳句会・中部日本俳句作家会・朔多恭・太田きん子・金坂豊・千田一路・竹本青苑・根岸善雄・河本和・西田尚子・黒木信行・黒田光子・澤島美世子・塩澤沫波・瀬谷和夫・求龍堂　阿部誠文・岸田潮二・松本とみ・青木秋雄・稲垣郭公・太田嗟・栗橋千津・米井竹村・高崎武義・立原修志・南雲信也・前西一尾・水見寿男・桔槔吟社・箕岡夕子・小林一昭・森川蟻城・前田利見・多児白汀子・秋山まさあき・内田滋子・松山輝夫　立風書房・三星山彦・鴨沢喜雨・総社俳句会・榛谷三枝子・野田麦笛・峰尾北兎・立川市民俳句会・吉田千重子・小杉俳句会・雲母編集部・島根県俳句協会・川口比呂之・奥崎昇・中本冬子・椎橋清翠・高橋伸張子・大峯あきら　橋川はな・寺内幸子・横田矢凪・長谷川暢之・畠中淳・玉藻社・牧野吐龍・卯辰山文庫・吉村きよみ・信坂正三郎・大森扶起子・俳海発行所・「風」練馬辛夷句会・小松崎智・瀬頭平吉・福田加代子・河原治・野口立甫・平野平八・樽沼けい一・小室善行　栗田やすし・久保草洋・高橋春灯・西村数・中西白渓・成瀬正俊・松永あや子・吉良蘇月・東急百貨店・藤浦道代・木下子龍・村上梅泉・工藤紫蘇・太田鴻村・阿部光次・三溝沙美句集刊行委員会・東京堂出版・岩上とし子

編集室から

▽…霞が関東京会館における二十周年記念式典・祝賀懇親会は、関係諸団体より多数のご来賓を迎えて盛会であった。協会側を併せて出席総数三五〇余名、当初の予測二八〇名前後…をはるかに超え、事務当局はうれしい悲鳴をあげた次第であった。当日、行届かぬ点が多々あったことを深くお詫び申上げる。

▽…本部の式典は終って、いよいよ四月から関西大会を皮切りに北陸、北海道と全国各地に大会の輪がひろがる。すでに地元事務局との最後の詰めも終わり実行段階に入った。中央講師も多数出席するので、地方会員との交流の面でもその成果が期待される。

（宮　下）

▽…二十周年に因み、「ちょっとひとこと」と題して、会員の皆様からの声を特集しました。会員名簿から無作為にご依頼したものですが、俳人協会へのご意見等多種多様の内容――これからの指針の参考になればと思います。

▽…昨年の十月、平畑静塔先生が顧問をしておられる宇都宮病院へお邪魔しました。外国旅行から帰って一段落――という時、お弟子さんで宇都宮に住む内田滋子さんとご一緒にお話を伺いました。

▽…先号でもお知らせしましたが、印刷がCTS方式に変わり、戸惑いがちの編集です。夏過ぎ頃には、文字を少し大きめにとも考慮しています。裸樹達も次次に花開き、自然界の春も真っ盛りを迎えようとしています。（吉　野）

水芭蕉ひらきし花の一頁　平畑静塔

会員除名の取扱い

甲野一修氏は、定款の規定（会費未納）により、会員除名の取扱いをいたしました。

（56・12・31）

短信

◇二十周年記念品として、俳句手帳（カバー付）を全会員に贈呈することになり、四月中旬発送します。四月中に未着の場合は、俳人協会事務局までご連絡下さい。

（係より）

『自註現代俳句シリーズ』より抜粋

第四期『市村究一郎集』より

二の滝は目を洗ふ滝瑠璃鳥の声　昭和五六年作

横川から山へ少し入った所に、不動の滝がある。四月二十八日が滝びらきで、ほら貝が吹き鳴らされて始まる。るりは谷川や沢が好きな鳥。

同　『原　柯城集』より

巨桜まつたし百歩しりぞきて　昭和五四年作

奥美濃根尾の淡墨桜。継体天皇のお手植とも樹齢千年を越すとも言われ、何故か私をして百歩しりぞかしめ、はじめて全容を見ることが出来た。

第二期『進藤　一考集』より

名乗るべく山々出でて鳥雲に

飯田の作。天竜川はまだ冷たく木の芽も固かったが、高みに出てみるとそこは陽光の世界で山々が立ち塞がっていた。まさしく春嶺だった。

五月刊

〈第四期〉　那須　乙郎集　神蔵　器集
岡部六弥太集

中村俊定監修　関森勝夫著
難解季語辞典
●内容見本呈
古典俳句の難解な季語を解説し
俳句をよむ人に、また近世文学の研究に至便！
江戸時代の俳句には現代の歳時記にはみられない意味のわかりにくい、あるいは表記の難しい季語が多く使われており、正しい解釈や鑑賞を困難にしている。このような難解季語二〇〇〇を収め、その読み方や季節・意味などを例句を示して解説。当時の風俗・習慣・言語を知る上にも貴重。B6四五〇〇円
季語辞典　俳句鑑賞辞典
大後美保編　気象学者の立場で季語を詳しく解説した新歳時記。二八〇〇円
水原秋桜子編　二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一千を収め鑑賞す。二三〇〇円
101東京都神田錦町3の7　東京堂出版　☎03-233-3741振東京3-270